柳の雑話

麻生路郎・主宰　二月號

Pensoj flugas trans la land-limon

ニキビ

りとびきに

美顔水

の等虫京南・蚊・蚤
！時いユカて虫毒

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！　ゼヒお勸したい藥です！

是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
藥	に	・

阪大・京東

桃谷順天館

必勝祈願　福井哲撮影

漫筆

銃後の匂ひ

＝戰線の兵隊さんへ贈る＝

（一〇）動物園長退く

川柳とも、お馴染みの深い動物園長林佐市氏が勇退された。新聞で知つて、ハッと胸をうたれた。何んだか淋びしいものが迫つて來る。市長が辭められたと聞いても、そうかなア位で、濟んでしまうのに、その下役の動物園長が勇退されたために、胸をうたれるといふことは、動物園長といふ仕事が、ただの役人の仕事でないことを物語つてゐるのではあるまいか。

ああした仕事は、私が川柳で動いてゐるやうに、その人の一生を捧げる仕事ではないのであらうか。役人だとすると、矢張り或る時期には勇退しなければならないのであらうか。勇退した林さんも淋びしいだらうが、すべての動物が親に別れたやうな淋しさを感じてゐることだらう。

（一一）人形遣ひと文化賞

「文榮」の人形遣ひ榮三、文五郎の兩翁が朝日の文化賞をもらつた。その人たちと其の周圍にとつて、これ位大きな歡びはないだらう。私たちは斯うした陰の舞のやうな仕事に、ただ默々として働いて來た人たちをうかみ上らせることを忘れたかつた朝日の人たちに敬意を表したい。宣傳屋ののさばるのを觀て常に胸糞を惡くしてゐる私たちだ。この快擧はたしかに一服の清涼劑である。

（一二）値上げの影響

戰費の捻出の意味で煙草の大幅の値上げが斷行されたその翌日。煙管が飛ぶやうに賣れたそうである。いかにもしみつたれた話である。

（一三）敵愾心

近ごろ、敵愾心が問題になつて來たが――歸還兵は何んにも云はぬし、新聞は戰果を傳へる以外何も書かない。敵愾心が燃え上らぬのも無理はない。私は滿州の居留民の慘虐の跡を目擊して、飽くなき非人道ぶりに、悲憤の極まなしりの裂ける思ひがした。ソロモン海域の事情がそろ〳〵明らかにされて來たことは敵愾心昂揚の發源體となるに違ひない。親の懷具合のいいとこだけ見せて、こどもたちに無駄遣ひを戒めてもきめがないのと同じだ。少々味方にとつて不利益な點があらうとも、それがために悲觀するやうな國民は一人もゐない筈だ。ドシ〳〵知らして貰ひたい。共に歎び共に悲憤慷慨して、一時も早く米英撃滅の最後の段階へ彼等を押流さうではないか。

（一四）歸還兵

歸還兵がよく訪ねてくれる。みんな丸々と太つて戻る。

――喰べものがいいからだぜ。

と云ふと、云ひ合せたやうにニヤリと笑ふ。

――毎日、ブタばかり喰べてたんだらう。

と云うと、一樣に、

――ハア、そうであります。

（一五）千人針

雖波の驛の入口のところに、一人の娘の子が千人針を持つて立つてゐる。フト見ると私の末の娘である。オヤ〳〵と思つた――××のかい。

と私は近づきながら聞いた。

――エヽ。

彼の女の從兄弟への贈物なのである。私も餞けの一句を贈ることとした。

一門を背負ひ軍靴の音をさせ

（路郎生）

川柳雜誌・二月號目次

表紙（戎克）……岩崎柳路

漫筆 銃後の匂ひ……麻生路郎…（一）

草木徒然……西田紳樂…（一二）

武玉川研究（二七）……梅本曙山・森東魚・蟹子・省二…（二）

隨筆 丹波の餅を語る……小山文三…（六）

川柳世界史（二一）……戸田孤蓬…（一七）

語源覺書（二）……淺田一…（二三）

彼を見て我を思ふ……（四）
高田義一郎・高尾亮雄・須崎豆秋
前田五健・小山文三・後藤田凡生

月評 川柳一ト筋……葭乃・紫香・帆船・一笑・香林…（一四）

裏日本より……安川久留美…（八）

大東亞戰爭一周年記念川柳大會……（二四）

★

近作柳樽……麻生路郎選…（一八）

川柳塔……麻生路郎選…（八）

同舟近詠……諸家…（二二）

一路集

榮轉……橋本緣雨…（二二）

國訛……須崎豆秋選…（二二）

各地柳壇……（一七）

川協・柳界展望……（一六）廻轉椅子……（一六）

川柳類題索引……（一〇）社關係の人々……（二二）

必勝祈願（扉）……福井哲撮影…（一）

武玉川研究（一二七）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

五編（九）

（140）

そろ盤へ乘セれハ人も怖い物

省二＝娘を賣る場合、金錢に見積ればの意か。

東魚＝一人前になる迄を算用してみると、さて相當の金高が掛かつて居るとの心持ちかと思ふ。（身賣の場合とも考へられる）

塵山＝東魚君説が正しいやうであるが、私は身賣の場合でないと思ふ。

（141）

子福者の蚊屋へ算へてつゝき込

東魚＝一人一人蚊屋へ小供を追込むやうに、寢かす場合

塵山＝子福者であつても、金福者では無からう。

省二＝胸算で……呵々

（142）

船頭の腹へ響ける大つゝみ

東魚＝堂々とした屋形船の遊山であらうか。

塵山＝大名の船遊山らしい。

省二＝大鼓まで響くのだから。

（143）

糸鬢になる言譯の種

省二＝前に「舅の譽る聟の糸鬢」があつた。道樂をした言譯に糸鬢になり、今後は眞面目になると姿で示したもの、――兩鬢をせまくし糸の如く殘し、前を非常に廣く剃つたもの。

東魚＝前説につきる。

塵山＝是より一層の言譯には、坊主になる。

（144）

高繩の人ハ帆を呑人を呑

省二＝高繩の繁昌さを詠むだもの江戸の出入口だから、人の往來、船も出入する。人を帆を呑吐する。――「數萬艘入れても廣い江戸の袖」

東魚＝高繩は、江戸の「のどくび」である。

塵山＝點者紀逸が好みさうな句でちよつと面白く詠むである。

（145）

天下明るき猪牙に上下

省二＝猪牙に乘るのは北國行ときまつて居るが、上下姿で乘るのでは他に用事のためだらうから、顏を上けて乘つてゆける。「天下明るき」だ。

東魚＝猪牙には野暮だと云ふ意味合ひを、裏に含む樣に思はれる。

塵山＝此句は北國行きを詠むだものではなく、何か武士が至急の要事に由つて、猪牙舟をやとつて乘つたのではない歟。

（146）

煩ふ奴さかつきて呑

省二＝いつもなら茶碗で、ひつかけるのに。

東魚＝六法言葉の、あばれ者が想像される。

塵山＝平素の寛潤なる擧動と變り小盃でちびり〳〵とやるのであらう。

（147）

灸を落して眞直に立

省二＝三里の灸でも据えてゐたのであらう。灸を落し眞直に立つてみる。――心持ちを示さんとした句。

東魚＝快癒した心持ちがみえる。

塵山＝未だ快癒したのではなく、灸を据ゑた直後の動作であらう。

（148）

潮來のさわき棒の手も出ル

省二＝潮來は常陸にある。遊廓もあつて繁昌した。棒の手までも出る大騷だ。今ならば劍舞をやるところ

東魚＝土地柄だけに、鹿嶋流の棒の一と手を心得た者も、一座にあると云ふ作爲で、「潮來」をそこで動かぬものにしてゐる。

塵山＝前二説で盡きてゐる。

省二＝鹿島流は劍術の一派。鹿島神宮の神官により出しといふ。松林左馬助始て傳ふと。常陸は武技の旺んなところ、「北條五代記」兵法の起は鹿島の神に始るよしなどいひて鹿島の住人飯篠山城守家直兵法の術を傳へしよりこの方世上に廣まりぬ。此人中古の關山なり。又天正の頃ほひ、常陸國江戸崎といふ處に諸岡一羽といふ兵法の名人あり。

（149）

めてたかられるすつぽんの年

省二＝萬年も生きる龜の類緣として此句がある。成熟するに二十年を要し、長壽のもの、往々二百歲以上に達すといふ。

東魚＝龜の親類のやうなものだから、さうもあらう。

塵山＝龜の萬年は誰でも知つて居るが、鼈の年に到つては誰も知つてゐまい。

（150）

百石買て江戸を古郷

省二＝金で家柄（株）を買ふ。而て江戸を古郷として居つく。

東魚＝前説の如くであらう。

塵山＝幕府の御家人の株を買ひ、江戸の地を退去する者は無かつたと想ふ。

(151) **傘て行人の限りの東海寺**

東魚＝傘など持つた人は、東海寺附近迄はみかけるが、これより先きは全くの道中姿の人達ばかりで、菅笠合羽と云ふ出立ちを見かける計りだとの意と思ふ。

塵山＝前説の如くであらう。

省二＝此句判り兼ねた。私は傘で行かぬ人は品川行かと思つた。東海寺には澤庵和尚の墓あり、紅葉の名所。

(152) **雲て従弟のしれる冷飯**

省二＝客なれば冷飯は出されぬ。夫れで従弟である事が知れる。

東魚＝冷飯などあてがはれて、従弟と云ふ下風に立たねばならぬ身の上を、感じる意でもあるか。（冷飯をけちな情事の意味につかふやうにも思ふのだが、確證を得ない）。

塵山＝此の従弟は、現に食客であるらしい。

(153) **まんたらハ三百両て目か覺る**

東魚＝目が覺める如き、立派な（まんだら）と云ふのであらうか。或寺へ入れあけてゐた後家が、三百両も「まんだら」の費用を要求されて對手の慾にかかつてゐるのに、目が覺めたとでも云ふのか。

塵山＝私は孀婦に無關係の句と思ふ。

省二＝「三百両」ときつてある點に、疑問があつた。莫大な金と解すれば足りる。

(154) **六月の夜も妙藥のうち**

東魚＝短夜故に毒になる程、淫樂にふけらせぬとでも云ふ意か。

塵山＝昔は五月を禁婬の月とした故、六月の夜も亦禁婬するのが、身體の爲に藥となると云ふのであるらしい。

省二＝「妙藥」――確に妙だ。

(155) **物喰ふて瘦ると親ハ合點して**

東魚＝姙娠の徴候だと、合點するのかと思ふ。

塵山＝前解の如くであらう。

省二＝「合點して」が大に働く。

(156) **兩六原へ持て出る夢**

東魚＝兩六原は、六波羅の南北兩役所である。訴へ事の勝ちと云ふ夢を、お互に持つて出て來ると云ふのかと思ふ。

塵山＝所領安堵の請願かと思はれる。

省二＝兩六原は京の守護に當る外訴訟庶務其他萬般の事務を掌つてゐた。句意の大略は見當がつきさうに存ずるが、「夢」をはつきり解する手蔓が欲しい氣がする。

(157) **能いロか有れハ宗旨が氣にいらす**

省二＝良緣だと思ふけれど、先方の宗旨が氣にいらぬ。固法華に門徒など一例。昔は兎角問題になつた。

東魚＝今でも宗旨は六ケ敷い連中も、相當ありさうだ。

塵山＝基督教ならば、あゝ面倒である。

(158) **舌て疊てわたすほうつき**

東魚＝舌で疊むやうにして、友達に渡すので、舌の先きは中々慣れて巧な事をする。さくらんぼの軸など舌で結ぶ事を藝者などが、座興にやるのを知つてゐる。

塵山＝舌で疊むとは、作者も巧みである。

省二＝風情のある句だ。ほゝづきを鳴らす事にさへ風情がありはする。

(159) **従弟同士は突はなし物**

省二＝「突はなす」は、關係を絶つ、或は、放つて置いてもよい、と云ふやうな意味がある。前者だと従兄弟となれば兄弟と違ひ、段々緣が遠くなつてしまふわけ。後者だと従弟同士だから放かりぱなしにしてあるとなる。

東魚＝従弟とあるが、男女の間柄かと思ふ。當人同士にまかせ放しと云ふ心持ちと考へる。

塵山＝兄弟は他人の始まりと云ふ故、従弟同士ではいよ〳〵緣が遠くなる。されば重要の相談などには乘らぬのであらう。

(160) **正月に成とそろ〳〵馬鹿に成**

東魚＝暮は智惠をしぼつて切り拔けたが、正月ともなれば、もう咽喉元すぎれば、の譬の如くなる。

塵山＝回禮の歸途に路傍に醉倒れて、警官などにも手數を掛ける。

省二＝一年の計をたてぬ徒輩である。

武玉川研究正誤表（二二八號）

(頁)	(段)	(行)	(誤)	(正)
十五	一	十	分●	戸橋 今

彼を見て我を思ふ

靜觀斷行の糧として諸家の聲を聽く
—編輯局—

○ 高田義一郎

私の住所へ時々やつて來る下駄の齒入れがある。何の苦も無ささうに鼓を叩いて、頼む人があれば、忽ちすわり込んで齒を入れてくれる。いつもニコ〳〵笑つてゐる姿が、まことにユツタリしてゐて美しい。

私などは、なまじ學校などへ行つた爲に、「人が見るだらう」とか「笑はれやしない」とか、いろ〳〵の雜念が出來て、この人の樣に何でも虛心平氣にやつて行けない。今日から齒入れ屋になつても、もう晩い。あの人を見ると、「あゝなれたらいゝだらう」としみ〴〵思ふ。

私はいつでも、下駄の齒入屋が鼓をたゝきながら、ノンキに道を行く姿を見る毎に、そんなに思つてゐる。

○ 高尾亮雄

山本一清博士の山村の天文臺が江州の博士の鄕里（滋賀縣栗太郡田上村桐生）にできたといふので、案内をうけてゐたものゝ、竣成式には不參やうやく昨年の秋になつて訪ふ。

昔の東海道と中仙道の別れ道、草津の驛で汽車を降りて水の流れた草津川の堤防にそひつゝ上流の方へ五十丁、川はいつか桐生村に入つて桐生川となる。その道がとても閑かで心を落ちつかせる。山の峽が迫つて、川上にはもう村里もないと思はれる處に、ぱつと開けた盆地、田舍家が點々、宮もある、寺ある、見れども天文臺らしい建物は眼に入らぬ。大根洗ふ村娘に尋ねると「誠之進さんとこどすやらふ」といふ。竹籔の小路をくゞりぬけて小さな坂をのぼりつめると、長屋門の家がある。代々「誠之進さん」で通つた舊家で、山本姓はこの村中澤山あるとのこと。

博士夫妻に迎へられ、玄關に入る。「靜山長日」「難有百術不如一淸」の一六居士筆の額が掲つてある。私も同國人のよしみ、大先輩の遺墨を見るのが懷しい。

さて天文臺はといふと、古い土藏の床の下を掘つて地下室、二階の上にもう一階增築して、その屋根が丁度芝居の奈落の廻はり舞臺のやうに挺子で以て一人の力でも動かせる仕掛け、屋根の天井には一ケ所、天窓の板が斜めに紐で昇降できるやうになつてゐる。この窓へとても大きな口徑の望遠鏡がぐつと天臺の方に向けて覗かれる。こゝから星を觀測するのである。

も一つ星の寫眞を撮るためとして、その星の運行の速度に合せて望遠鏡も機械的に運行するやうに重い分銅が二個鎖にかけてある。昔あつた舊式な御殿時計と同じ仕組み。こゝまで仕上げるには博士の設計と奥さんの施行と相俟つてとても〳〵苦心の末完成されたものである。世界唯一つの日本建築の土藏利用の天文臺で、博士の大に誇りとされるところである。その他にはもう一つの天文觀測臺とまだ數々の裝置があるがわれ〳〵素人には解らない。

なほ博士に聞くと、この地には世界の天文學上、著名なる「田上隕鐵」の落ちた所でもあるそうな。また「近江と天文學」の因緣としては天智天皇、平石時光、紀正臣、國友一貫齋、水原準三ら、中村要、いづれも曆學の大家ぞろい、こゝにまた新に一淸博士を加へることゝなるわけ。私も同國人の一人として「彼ら先人の業績を見て我を思ふ」こと切なりである。

○ 須崎豆秋

芭蕉翁は五十一才で歿してゐる。

私なぞ芭蕉翁とおない年だが、まだ〳〵（嵯千さへ冠つて居れば）電車やバスの中で、翁として坐席をゆづつてくれる人なんかありませんよ。

馬鹿は若く見えるつてネ。

○ 前田五健

ズラリ千に近い狸の中へ、狸の火鉢、狸の茶瓶、狸の茶碗で茶をのみながら納まつて居る彼は、全く彼の云ふ通り超禪境地であらふ。たゞこれだけの事なら誰れも感心せぬが、否な蠻逋、遊離と反て、何んとか云はれさうなが、彼は決して、そんな、お上品の體裁のいゝ、ソコラにあるシロモノでない。狸物像を通して狸念（包容、智力、献身、感謝、圓滑、等々々）を活用して居るから、偉いものである。その一例として私力で日華女學生の交歡をやり、おエラ方の鼻をあかせたり、又、後輩明大生の指導を毎夏季に見事やつてのけたり、七變八化の大舞臺を見せる。それに、その感化は家族一同、同じ穴の狸念徹底だから、夫人は勿論四歳のお子達まで時局に對しても總力集中の御奉公ぶりを默々と實踐する。狸風駘蕩、

羨やましい限りである。顧みて私は未だに川柳を家庭に斯くまで及ぼして居ない、誠に恥かしく殘念に思つて居る……。彼とは溫泉で有名な道後の町會議員であり岡田三面子博士から多少の柳風も受けた富田壽久氏、號は狸通、狸とは狸のオモチヤやら、あらゆる狸の器物である。

○

小山文三

彼氏は今六十餘歳、性來落ちつき拂つた性格で未だ嘗て豫定の汽車に間に合つた事がないと言ふのである。たつた一度其汽車までに若干の餘裕があつたので驛で散髪をしてゐたら、つい又乘り後れてしまつたと言ふ挿話の持主である。私は彼氏の泰然たる暢氣さを習はんとして未だ修得し得ないのである。

さる女性は茲十數年一枚の着物一ケの裝身具も新調しないが常に整つた服裝と端然たる容姿である。例へば若い頃の鹿の子を綴り合せて立派な蒲團としたり、古い帶でハンドバツグを作つたりして其持ち物の更生と再製に工夫を加へるのである。私は此女性から紙の再用、封筒の裏返しを習つたが到底彼の女性の手製の福袋や卷紙にはまだ〳〵及ばないのである。

○

後藤田凡生

人間は天眞爛漫を愛すと謂ふ……〃彼を見て我を思ふ〃といふ首題に對して、小生は生をこの世に享けてより彼の人生十戒に制肘されぬ、其の行動の天眞爛漫な自由さを羨望すること切なりである。

彼の母親といふのは世に謂ふ自由な女性として感情の赴むくまゝに行動することを愛した。體面といふ自ら發案したブレーキに委縮の化身となり、果てた哀れむべき、そして臆病なモノシリ共はその自由奔放な行動を嫉むあまり彼女を稱して蓄生道に墜ちたゆるすべからざる淫婦であると忌んだ。次から次へと男を替へるその母親の胎内に宿つた彼は生をうける以前より既に侮辱の世間があり、眞闇な世間が待つてゐた。その彼が〃おぎあー〃と眞ツ暗闇の世の中に尤もそのときは午前二時であつたが、初めて空氣を呼吸したとき、人々から敬遠されてゐる彼の母親は超人的な、ほんとうに超人的な努力をもつて、たつた一人で、介添へもなく彼を生んだのである。薄情な彼の父親はさんざん弄んだ女が身重になると同時に弊履の如く捨てゝ顧なかつた。既に幾人とも知れぬ男に同樣の仕打ちに遭つて來た彼の母親は男の無情をうらむやうなことはなかつた。ソレホド自由な女なのである。

彼の母親は鐵のやうな意志を以つて彼を育てた。その愛情は冷徹な學者どもには到底判斷出來得ざる程の一途なものであり、母性愛の極知といふべく、全くなめるが如くであつた——と彼は親友であり唯一の支援者である僕に語つたからホントであらう。

その母親の血を享けて生れた彼であるから、母親と同樣にその行動は無規道といふよりは無邪氣であり、天眞爛漫であつた。出產屆もなく、隣組へも加へてもらへなかつた。從つて誰にも相手にされなかつた。世間の子供たちの樣ーに。學校へも行かなかつたし〃照る照る坊子テルボズ〃の歌も唱はなかつた。全の孤獨に充たされた生活であつたが彼は樂しかつた。

朝早く起きると母親と一緒に喰ひのこりの食物を貰ひに廻つた。さうしなければ配給のない母子には生きて行く術がなかつた（アーー可哀さうに）しかし現在の世の中はさうどこの家にも食ひ殘りの食物とてはなかつた。時には同情して惠んでくれる人もあつたが二日も三日も食べぬ日が續いたこともあつた。しかしどうにかこうにか生をつなぐことは出來た。

生きて行くことが出來れば其他のことは別に苦にもならなかつた。たつた一枚の着物で過ごせる彼は衣料切符がどうの、煙草があがつたといつてはさわぐ世間の者どもが全く馬鹿々々しかつた。喰へさへすればその他のことはどうでもよかつた。次々に戀愛をした、書癡もした。嫌な學者どもにも眞正面から怒鳴つてやつたし、嚙みついてやつたこともあつた。全く思ふまゝに振りまわつた。

しかしである。しかし年四回の野犬狩りにはその度毎に壽命を縮める思ひをするのであつた。彼といふのは、今は放浪生活の後、僕の家に飼はれてゐる黑スケのことである。

〔窓〕

★詐僞と宣傳とは賭博と株式ほどによく似てゐる。公益と私慾の壁一ト重である。

★詐欺的行爲を觀破することは、そう困難なことではない。スモカの蓋をあけるのに引ッ張るやうな紐が、どつかにあるから、それを引ッ張りさへすればいい。積極的には紐を引ッ張ることだが、消極的には無慾であることだ。

★軍人遺家族をだます詐欺がある。公憤を感ぜずにはゐられぬ。

（不死鳥）

隨筆 丹波の餅を語る

小山文三

米の粉も寒中に挽いたのを寒晒しと言つて珍重する、此寒晒しは壺の中に入れて永く財蔵される、これには虫がつかないし、變質もしないし、且つ一番うまいとされてゐる

團子を造るには此米の粉にぬるま湯を加へつゝ小さな半ほうの中で手でこね廻し、頃合を見て小丸團子や握り團子の形にしてしばらく沸騰した湯鍋で煮沸して引き揚げるのである。これに砂糖を振りかけたり黄ナ粉をまぶしたり、小豆餡をつけたりするのである。そしてそれを冷え切らない内に食べるのは一寸オツなものである。

○

丹波では月の二十一日のお大師さんや佛の命日にかこつけて頻りに團子を作つたものであつたが今の様な砂糖、豆大豆の統制時代にはそうそう簡單には作れないらしい。

團子の大量生産にはやつぱり餅搗きと同様に立チ臼で搗くのである。即ち米の粉をこね上げて小塊とし蒸籠で蒸し上げて杵で搗くのである。團子を搗くのは餅を搗くよりも早くて樂であるが、やゝもすると杵にくつ着くからやはりあしらい人が要るのである。

團子は糯米の粉を用ゆるのを最上とするが普通には粳米を用ゐる事は先に述べた。團子を造るには粳米を精白して十分に洗つて水を切り之を乾燥して碾臼で碾くのである。今は昔納屋の隅や、味噌部屋の隅で、襷がけの主婦が右の手に碾臼のハンドルを握りてあしらい、左の手で石臼の穴に少しづゝ米を落し之を手傳ふ女中さんが肌脱ぎの襷がけで碾き枷で押し廻して冬の夜なべにのんびりと臼碾きを樂しんでゐた風情を思ひ出すのである。

斯くする事に因て手でこねたよりも能くこねられて、出來榮へが良いのである。

粳米の團子のこね上げたのと糯米の洗つたのとを混ぜて同じ蒸籠で蒸して搗いたのは餅團子と言つて普通の團子よりもうまいし、牡丹餅や安倍川餅なぞにするには却つてあつさりしてねばつかないからほんとうの餅よりも良いと言ふ人もある。

○

筆者の郷里に名物みたらし團子があつた。街道端の茶店の親爺さんが義太夫の道樂があつて村の若者に稽古をつけてゐたりしてゐた。其おかみさんが降る日も照る日も缺かさずに毎日二タ臼、三臼を造り、殊に蓬を多分に用意してゐて年中いつでも蓬の香り高いのを賣つてゐたし、團子の形も大きくて、五ツ宛竹の魚串に刺して、たつぷりとあづき餡を附けてゐたから、道往く人の評判となり、秋の陽ざしの晝下りなぞ中々繁昌して近郷近在の名物團子になつてゐた。

昔は一本五厘であつたが一錢となり二錢となり三錢となり、だんだん形が小さくなり砂糖が減つたり、餡が少くなり遂には米の粉よりも蓬の方が多い位になつたりした。

其頃此村に郡長さんが民情視察に來られたので、名物みたらし團子を御茶うけに差し出した處一串だけ食つてあとは手をつけず、且つうまいとも何とも仰言らなかつた事を憶ひ出して苦笑を禁じ得ないのである。

斯くして浮世の風は此名物團子にも容赦なく襲ひかゝつて今は其茶店さへ無くなつてゐるのは惜しい事である。

○

團子の大量生産にはやつぱり餅搗きと同様に立ち臼で搗くのである。即ち米の粉をこね上げて小塊とし蒸籠で蒸し上げて、湯水であしらひながら杵で搗くのである。團子を搗くのは餅を搗くよりも早くて且つ杵にくつつかないから餘程樂であるが、こうする事に因て手でこねるよりも能くこねられて出來榮へがよいのである。

硬米の團子をこね上げたのと糯米の洗つたのを混ぜて同じ蒸籠で蒸して能く搗いたのは餅團子と言つて普通の團子よりもうまいし小豆餡を附けた牡丹餅や、黄ナ粉を附けた阿倍川餅なぞにするには却てねばつかなくて、あつさりしてゐるからほんとうの餅よりも却て風味があると言ふ通人もあるのである。

○

糯米と硬米とを混ぜて蒸して搗き上げるものもある。之れは其原米の各其脂肪質の含有量が相違するし粘着力と光澤が違ふから非常に搗きにくい。そして味が淡白で齒切れがよいし一寸硬米の香氣もあるので、特に之れを好む人もある。大阪邊りの御飾り餅は此の種に屬するのであつて採算上から餅米の少量に硬米の大半が混ぜてあるから皮肉に申さば餅米の入つた團子に過ぎないのである。だから丹波の硬米交りの餅よりも幾分まづいのである。

○

秋の收穫の籾摺りに碎米となつたものを小米と言ふ、此糯米の小米や硬米の小米に糯米を少し混ぜて、同じ様に蒸籠で蒸して搗いた餅を丹波ではアラアラ餅又は黄金餅と言ふ。素々碎米であるから、杵の小搗きを十分にしないと餅にはならないし、いくら搗いても搗き切れないで少々は小米の形のまゝ餅の中に殘つて荒い餅になるからアラアラと

言つたものであろうか黄金餅と言ふ由來はまだ判らないのである。

粘り氣が少くて極めてアッサリしてゐる外に搗き切れなかつた小米が含まれて居るから一種の違つた風味があつて茶人などに喜ばれるものである。小米は普通に煮炊すきるのは隨分厄介であるし、あまりうまくもないので、之れを餅にして、風味する事を考へついた昔の丹波人は相當茶人めいた洒い處があつたのだろうと伺はれるのである。

○

粟餅は粟を精白して若干の糯米を混へて蒸して搗くのであるが非常に小粒だから杵の小搗きに細心の注意を要するのである。粟餅は誠にうまく、そして飴の樣な強い粘着性があるし、黄色い光澤があつて若干の粟粒が殘つたりしてゐるから一層の味覺をそゝるのである。

或山間部を訪れた都の客人がうつかり粟餅と粟飯を賞めたので純朴な家人から來る日も來る日も此粟飯と粟餅を振舞はれて、ホト〳〵厭きて終つた揚句、或夜の寢言に、これを言つて終つたので其後は之れを食べさゝれなかつたと言ふ話もある。

黍餅は黍を粉にひいてこね上げ之れに少しの糯米と共に蒸して搗いたものである。從つて餅と言ふよりは團子である。桃太郎の話にある樣に山間部では糯米が作れないから此黍團子を作るのである。焦げ茶色を呈して、あつさりしたと言ふよりもザク〳〵した味がある。

葛餅、蕨餅、粳餅は丹波では作らないから多くを語る種がない。

蕎麥の搔い餅は山妻の里方の得意とする處であつて、蕎麥粉を摺り鉢の中に入れて若干の湯水をくれて十分にこねて團子にするのである。此團子の中へ小豆餡を入れたり蠶豆の餡を入れたりして大きく四角に握り之れを圍爐裏で燒いて食ふのである。これ亦洒い風雅な味がある。

蕎麥をこねる事を丹波では蕎麥を搔くと云ふ。そして出來上つた團子を蕎麥の搔い團子と云ふのである。

○

大鏡餅は通例二升取りを以て一個とし二つ重ねて產土の神に供へるのである。丹波では正月には米倉の中の米俵の上に歲德神を祭るから之れに供へたり、普請、祝言、年賀などの祝儀事のある時は此大鏡餅を親類緣者に配つたりするのであつた。

上等の糯米で造つて十分に搗き上げた鏡餅は少々風に當つても容易にヒビ割れが出來ないし、黴が生じないが、都會の餅屋に賴んだ鏡餅などは直ぐにヒビ割れが出來たり、青い黴が生えるのである。畢竟糯米が惡るかつたり搗不足だつたり、むやみに水を吳れて嵩を見せるが爲めであろう。

丹波の酒屋や荒物屋などでは正月元日には業を休んで二日から店開きをするが、其正月二日の買初めの第一番の客には店に飾つた大鏡餅を吳れる習慣がある。だからこれを狙ふ先陣爭ひが、未だ明けやらぬ二日の未明から酒屋の戸を叩いて僅か二合足らずの酒の初買ひをやつて一重の大鏡餅をせしめた等の挿話があるし、筆者も若い頃正月二日の朝まだきに人力車に乘つて之れに供へられた一重の小鏡餅を、乘り初めの客として貰つて歸つた事もあつた。

鏡餅は一升どり、五合どり三合どりなどいろ〳〵ある。地神さんや佛樣に供へるのは中位の鏡餅を以てするし竈の神や、厠の神などには小鏡餅を供へるのである。

正月十五日には鏡餅を長い竹ノ先を割つたのに挾み左義長の火で燒いて持つて歸つて保存する。これをトンドの餅と云ふ。此トンドの餅は五月頃初雷の鳴つた日に家内中皆のものが頂いて食ふ習慣がある。そして之れを食ふ事に因つて雷の災厄から免れ得ると言ふのである。

○

左義長の餅に關聯して思ひ出すのはッ、オ團子の事である。秋の刈田や稻架の落ち穗は素より稻扱、籾摺りの操作に土の上へこぼれた籾はたとへ夫れが一粒であつても農家は之れを見逃さないで悉く拾ひ集めて、土砂や藁屑を除き丁寧に米にするのである。斯くして掃き集め寄せ集めた屑米をッ、オ米と言ふ。此ッ、オ米を粉にして作つた團子がッ、オ團子と云ふのである。丹波では正月十五日の〆上げの日に此ッ、オ團子をこしらへて家々の神棚に供へた後、正月の〆飾りを外づして左義長で燒き拂ふのである。ッ、オ團子はいろ〳〵の種類の米が混つてゐるので一寸變つた味のあるものであるが、それよりも道や庭に落ちた一粒の籾でさへ忽にしないで斯くの如く一種の行事としてッ、オ團子に造る事を教へた昔の丹波人の偉い處に自ら頭が下るのである。（未完）

社の回覽板

★川柳雜誌・建國記念川柳會

二月六日（第一土曜）五時半から御津八幡宮（南區八幡町佐野屋橋筋角・木綿橋電停東一丁）で建國二六〇三年を祝賀する川柳會を開催する。兼題は「先祖」と「井戸」各三句以内。路郎主幹の「神代を詠んだ句に就て」の講演がある。會費五〇錢、

★川雜四ッ橋、鶴町、天王寺の三支部を統合し、市電川柳會と改稱することとした。幹事は中内翠芳氏。

★川・雜松江支部幹事更迭、舊幹事田中將雄氏に代り岡崎祥月氏が新たに勞を擔はれた。

★川・雜猪川支部は滿十五周年を機會に出雲支部と改稱。

★川・雜花園支部（大阪）を新設した。幹事は福田妄夢氏。

★支部新設を希望される方は本社内支部係へ申込まれたい。

★不朽洞會への入會は會員の紹介を必要とする。

川柳塔

＝路郎選＝

元日の机ともかく書類なし　戸尾寺　井鋭々

角帯が哲學論も知つてゐる

足るを知ることと云ひ聞かせ餅を燒く

自動扉カバンを一つ殘したる

パンがなく餓死ぬやうにいふ夫人

齒科醫師の診療室に世界地圖　大阪府　戸田孤篷

區長だけ本物が居る慰靈祭

親戚は足音のする燒香し

見料をとる案内の勘高し　兵庫縣川西町　戸倉普天

暮の風にも母は千人針に立ち

社長の妾の娘の婿と云ふ權勢サ

供出の釣鐘、役場の前に來たまんま

神主の姿あり〳〵初日の出　尼崎　水谷鮎美

市川治男君に

ゆつくりと茶をのみ妻を見る若さ

夜の底作者は一人腹がへり

正月街の風景

正月の硝子越なり笑ふてゐ

貸家札隣りはパンの配給所

正月の風へ儲けゐる靴磨き

法善寺藝者の地聲聞いちまい　大阪　橋本綠雨

叔父さんは飛行機に乘つたことないの

伊勢詣

老杉の太さをはかる伊勢詣

十二月ビールの列とは思はれず

★

春場所へ首相の眼鏡光つてる　大阪　野元吐空

襟足へサブイボ立てゝ妓が通り

燒鳥屋煙むの中から釣を出し

ドラム罐積んで工場も木金金

四十すぎ内股に電車乘つて來る　大阪　岡島嶺泉

高野山にて（二句）

萱刈と紛ふ美僧に道をきゝ

落葉燒くとこへ立ち寄る世辭となり　川口　伊古田伊太古

ドツと來た笑ひ〆たと宣撫班

赤提灯横眼で行ける俺になり　大阪　木下幽王

軍神の村だ花咲け小鳥鳴け

戀愛か食慾か猿蚤をとる

シヤボン玉のごと標語現はる

スパルタ教育夫婦喧嘩の種となり

裏日本より

安川久留美

きのふ迄三十五錢で刈られた丸坊主の頭が一躍五十錢と値上した。何でも彼でも騰る一方だから床屋さんとして御尤もの事だと思ふ。然しバリカンを動かす彼氏にきくと『米も安い、醤油も安い、然し、組合費だ町費の追加だ、寄附だ、あれだ、これだと財布の紐をとかす事斗りだから醫へ散髪賃が二倍になつたつて有難くない』と仰せられる。又幾ら料金が四割高くなつても辯解を感じない。それはチック不要の丸刈では月に二度のところを一度に我慢し、剃髭を自宅で何とか撫でるやうに經濟する。斯うなると床屋さんの收入の多寡は料金の高低よりも時間の問題だ。櫛や鋏や香料に時間をひまどらすよりも國民一定に丸刈にする事だ。バリカンにさつさと刈るだけなら一つの頭を三十錢にしたつて數にこなして收入は減らない。お客さんも時間經濟になつて働く時間が多くなる。

丸刈にして能率の支配人
七三に分けて秋波のタイピスト

かゝる時男の櫛は何事ぞ
前線の兵士にすまぬ分け頭
散髪屋香水らしい水をふり　（古句）

◇　◇　◇

行列も一つの流行である。西人が

高蹈主義よ君も帽子をぬぎなはれ　大阪　須崎豆秋

爆弾ぐらい踏みつぶす氣のお元日
北ツ風賣つてもらほと思やこそ
チボ今日は國民服で出かけたり
雜炊のやうな夢見る寢正月　松本　石曾根民郎

いづれともなく外套の古き夢
石材に生命はあるか霰打つ
ありがたく冷たく墨の香の離愁
冬の雲あらはれ街は配給日
六十八歳の父、町内會長として奮闘たり
配給に區務に父いま老ひを知らず
畏くも　天皇陛下親しく神宮に御參拜遊ばさる
五十鈴川至尊を拜す冬烈し
龍顏に老杉肅と迎ふるや
首相謹話み民のこゝろ搏ちに搏つ　大阪　正本水客

おとこさかしく風呂敷をもちあるき
自作農日の出を拜む姿なり
元旦の葱の色さへ葱の色
軍刀の響するどきお元日
人ごみにもまれることも三ケ日
兄弟はいゝなと思ふ三ケ日
貰ひ子をして献金を思ひ立ち
献金の額へ係もちと慌て
献金へマスク外して這入つてき
佛門に入る日の空が澄渡り
雨しとゞ男のツラを立てにゆく　豐中　黒川紫香

儀禮章課長と同じ紋で來る
俗説へ碑石くづれたまゝに立ち
紫の富士を見て行く初飛行
粉な雪を顏でよけてる懐手
妻君に紹介される初詣　大阪　丸尾潮花

初産へ四、五人生んだ顏が寄り
モンペーで女給は畫の店を掃き
殘業殘業五分刈ほどに髭が伸び
誰のため生きる命か灯に稼ぎ
戰線の夫に負けぬヤスリだこ
落魄の身に年頃の娘がふたり
伊田無哲坊氏男子出産
勝鬨に似て産聲のたくましさ　大阪　北川春巣

名物の羔羹看板だけ殘り
仲人をする文献を買うて來る
電話口あるとは云へぬものを問ひ
時局談洒落をまぜても笑はない
父も子も母もマスクの初詣
おぢいちやんグリコ貰へる年になり
眠る子を抱いて子の夢なと思ふ
一升壜一本大阪驛へ降り
仲人のハリキリ散髪に見せて
休暇返上僕にも出來た御奉公　大阪　尾崎方正

おゝしんど臺の立ちたるまゝ殘り
俺が俺がでちつとも先は見えざりき

わざ〳〵時間の制限をする。賣る時間と不賣時間――だから自づと主婦の行列長蛇の如し。あの店はいつ行つても有るといふ事になれば、さのみ行列は出來ない。一時間待つて漸く大根一本、小半日待つて牛肉五十匁、これでは内職をもつ主婦は臺所のために收入が尠くなる。有閑婦人は一張羅を着込んで行列の中にのんびりとしてゐる。其差譏か見ても「氣の毒」と「當然だ」の二つに岐れる。

行列の中にバーマの面僧さ
行列にそむく女へ牡丹雪
行列のしんがり買はず明日を待ち

◇　◇　◇

農民たちの豫言の如く今年も大雪だ。小寒から本格的に降り積る。スコッパの除雪人夫出動に雪の世界の交通難を思はせる。雪卸しは次から次へと、――雪に埋る裏日本の光景は正に雪地獄といひたい位である。いよ〳〵畑ものは市場に現れず、無論鮮魚は食膳にのぼるまい。

保健もさること乍らスキーヤーは有閑らしく見える、彼等は疲れた所に鍾馗あり、蹇老酒あり？　雪は豐年の兆であつて貧乏人苛めである。雪見する程といふ注文の如くふらぬ大雪ではある。

雪達磨蔣介石に似てとける
雪達磨ルーズベルトの泣けるやう
雪に待つたまさか來れば試運轉

◇　◇　◇

非常時の新年には松の内はない。又どんど焚くなどの情景も無用だ。米英蔣の雪達磨をつくつて投げよ雪つぶて、そして一億火の玉ならぬ雪玉で進め〳〵勝利々々の萬歳だ！（二月六日）

原色を好むは同じ蹴出しに見
老耄の死角ねらつた議論する
一日の糧網棚へ忘れて來
赤づくし若い娘であればこそ　大阪　田中風葉

春芝居みかんの皮を踏まされる
當才の子を陸大へやると言ひ
子の事になれば笑うて話しかけ　廣島　濱田久米雄

決戰譜露路にも塵を留めまいぞ
髭剃つて來て賞與日の列にゐる
桃割れがちらほら見えてゐるゆとり
月給の話役人むきになり　大阪　中内翠芳

新世帶喧嘩するなと素見され
特配へ今年の感謝捧げとき
應召をすべき鐵瓶店にあり　下關　多田市多樓

君君と驛長親しみ易い人
決戰といふ正月を一寸醉ひ
お目出度うなどゝ元旦引繼がれ
決戰へ勝ち拔くクレーン動きつめ　大阪　夷一笑

見合からむつゝりとしてもどつて來
三ケ日暮から爪はのびたまゝ
大阪は用もないのに人出する
冬の雨いやな思ひに暮てゆき
變人のまがりなりにも世を渡り
鐵を打つ音にふけゆく新市内

風邪ひきへ春とは暦ばかりなり
母上六十一才となられる
初笑ひ母の羽織のひも紅し　今治　月原宵明

遊藝に秀でゝ主任にも成れず
拔擢へ四五人不平組は寄り
忠良の衆庶は酒でもめるなり
髭そる間女の愚痴を聞いてやり　大牟田　高田抱逸

子の寫眞催促するもビルマから
前身の知れる寫眞を燒棄てる
最惡の場合へ防空帽を購ひ
家中の切符で買つた子供服
粉炭を拂ひ千尺下のひろにする
汽車ごつこ疊のへりはスフだのに
父病む

養父だからせめて御酒を工面する
半身不隨臥たまゝ酒を欲しがられ
英米へ勝ち拔く迄を生かしたい
皆様の松屋勝手な値をつける
いゝ年でフグはフグはと手で拂ひ
心して天も收穫助けてゐ
やる顏で町會長を讓り合ひ
煎豆の列にゐるのもあほらしい
參事には所詮、希望を子につなぎ　下關　國弘半休

馬になり脚になりした若い頃
春の海かもめは何も知らず暮れ
決戰下海の底さへ汽車は行く

柳川 類題索引 (7)

川柳雜誌自一號至二一五號

▼題の配列はすべてABC順、題の下の日本數字は「川柳雜誌」の號數で、算用數字は其の號にある題の發表ページ數、例へば天才五(8)とあるは第五號(第一卷六月號)第八ページに天才の句があることを示すのである。

(一)人情、風俗、人事、身體、病氣(7)

T

天才　五(8)　六(31)　五〇(57)
友　一八六(17)　一八九(19)　一九九(23)
友達　四一(10)　五一(56)　一五三(42)　一八八(19)　二〇三(19)
罪　九(11)　四〇(34)
隣　九(12)　一八三(13)
テント　九(13)　四四(58)
村　五六(41)
年寄　一〇(8)　四五(52)
飛ぶ　一〇(12)
年增　一〇(16)
旅　一一三(46)　一八三(16)　一八五(16)　一八六(17)　二〇四(36)　二〇六(32)　二〇七(31)　二一二(32)
旅立　四六(44)
旅人　一一三(28)　一八五(15)
手切金　一七(12)　五三(50)

尼崎　小林文月

醒ケ井養鱒場見學

喰はれると知らずに鱒はよく太り
停留所昨日の女工とは見えず

尼崎　飯尾寄與史

物干の袖から一機二機三機
今日は全休屢よ酔かに下りてこい

京城　小川恒明

あの頃は島の娘が流行つてた
雪がこん〳〵寢臺券を買ひに行く
警報が解かれ寒さが身にこたへ
ストーブの番だけしてた三ケ日
四方拜四溫の風がこゝちよし
友情の手紙が雨に濡れて着き
大阪の話が咲いたほりごたつ
判捺せばすむ職域で氣が濟ます
軍神の家が見え出す村外れ

大阪　河野夜王

時來れば捧ぐいのちだいたわらむ
老兵無口戰陣訓は忘れてず
生き永らへてお百姓樣拜まれる
先輩としての言葉と聞いてをき

西宮　谷口綠葉

砂箱を取られてるのを兒が見つけ
空つ風今日は豆腐の配給日
閉店のベルへ笑つたカウンター
理智的と云はれてうれし娘のメガネ
滿員車啞の悲鳴もおしこまれ

大阪　武部香林

元朝へ隣の鷄が鳴いてくれ
如何に生きむ終りなき世の芽出たさを
決戰下陶器の餅も一つ買ひ

嶺泉君厄年

四十二の祝へ咲いた福壽草
正月の車掌お壽司のやうに詰め
又大阪見物かい人が來る

布施　上田翠光

醉う程に蔣介石は罵られ
米もつてまで白濱へ行きたいか
令嬢は顏に自信のあるマスク

大阪　八竹正柳

兵營生活吟

集團が生きる炊事の恐ろしさ
はつきりと個性を出して除隊せり

次男出產

泣聲が耳につかない父となり

京都　明石柳次

飾窓捷ち拔く文字に春が來た
作業服で來た友少し痩せを見せ

山口縣小郡町　長野井蛙

管理米抱える程の錠が下り
火叩きの煤けたまゝへ初日の出

銅供出

身を以て大楠公は又敎へ

堺　村上角堂

ソロモンへ續く潮湯で溫まり

轉地 一七(13)
爪 一七(23) 四六(51) 五五(54) 三三(34)
床上げ 一八(20)
泊り客 三(16)
立漆 三(20)
連れ 三(22) 三(23)
天職 三(23)
多忙 三(22)
抵當 三六(16)
頓服 三(28)
辻占 三〇(33)
芽 三五(13) 四六(51)
狩 五九(47)
退營 三六(62)
溜息 三七(36) 五八(49)
達者 三八(35)
突然 四〇(30) 一二(44)
退院 四一(11) 一八一(18)
展覽會 四一(12)
登山 四一(44)
聾 四一(54)
年上 四三(52)
取付け 四三(53)
誕生 一四八(56)
誕生日 四三(54) 五三(54)
一九三(18) 一九五(19)
得意 三五(31)
四三(55) 一九二(27)
七夕 四四(54) 五五(59)
短氣 四五(54) 五四(52)

草木徒然

西田艸樂

食へる野草のことども

内地米〇割、外米〇割、麥〇割の割合がどう上下しようと、純日本米の銀光りのする御飯には當抵、味に於て比較になるべくもないこと今更申す迄もない。しかし今日の日本では味がどうのかうのは問題でなく、腹一杯與へられることが、どれだけ有難い事であるかを思はねばならぬ。御飯は十分とは言へずとも榮養に不足なく配給されることが確實であることは安心だ。ところで御菜は？これは米の樣に一ケ年の消費量と收穫量、輸入量等を計算して配給量を一定するといふ風には行かない。配給所へその日〳〵の入荷量によつて受持區域の人口に配分されるから、必ずしも十分の榮養量が供給されてゐるとはいへない。足る事もあるし、足らぬ場合もないことはない。しかしこれだつて、今日は家の人數に割當てられるお菜の量がこれでは足らぬと思つても、直ぐ苦情をいふことが、古今未曾有の大戰爭下に於てどうして出來ようぞ、いや古今未曾有の大戰爭下に於て、政府の眞劍なる努力によつて、時に足らぬことがあつても、大體不足なき量が配給されてゐることはありがたく、鯛が食へぬ、肉が當らぬとこぼす事がどうして出來よう。

世の中はいつも月夜に米の飯
さてまた申しかねのほしさよ

これは蜀山人の狂歌で、大江戸の繁榮を以つてしても大衆の願ひがこれであつた。しかも平時である。米の飯は總ての階級の人民が常食としてゐたのではなかつたのである。

聞いたかと問へば食つたかと答へ　古句

宵越の金を使はぬといはれた江戸ッ兒でさへ、そう安々と初鰹が口へはいらなかつたのである。今日の日本人が美食が出來ぬ、飽食がしたいと願ふことが大戰の最中であることよりも、あまりにも文化の惠澤に浴し過ぎてゐたことに氣づかねばならない。

昔の非常時といふものは今日の吾々とは比較にならぬもつと〳〵ひどい狀態であつた。一度饑饉に遇ふとか、城を圍まれるといふ場合は、實に野に青色なく、城内鼠の生を保つすべなき貧困にあつて一握の干飯を主從で分つて食しながら頑張つたのである。

故に昔は平素に於てかういふ非常時に對する用意と訓練が行はれた。

畔食ひと荒物食ひの日

どういふ事かといふと、畔食ひの日とは、日を定めて、朝、鹽と味噌ぐらひのものを持つて野に出でる。即ち田の畔などで、食用に堪ふる野草を採つて、食鹽と味噌で味をつけて食ひ、終日家に歸つて火食をしないのである。荒物食ひの日とは、平生庖厨に於て棄て去るべき食物の糟、即ち茄子の皮、芋の皮、南瓜の種、米の糠、大根の切端といつたものを種々工夫をして終日それを食つて過すのである。これらは昔の人々が一朝事ある場合何を食つてでも生き拔くべき精神を養ひ、訓練をしたのである。

食へる野草

私が奈良縣の衞生課に勤めてゐた頃、今から二十年昔にもなるが、その頃かの有名な米騷動といふものがあつた。又その頃安價生活といふ語が流行した。相當やかましい食糧問題が起つたのである。私はその頃から救荒植物を研究する樣になつた。支那事變の容易ならぬ形相、大東亞戰爭

つり錢　五五(58)
年玉　四九(63)
當選　五二(56)
共稼　五二(54)
立聞き　五二(54)　四四(55)
他人　五三(51)
手土産　五三(54)　一九三(18)
得心　五三(55)
投・票　四四(53)
追悼吟　五七(50)
辻斬　五八(43)
焚火　五八(50)
立話　五九(52)　一八〇(18)
取次　六三(33)　一八四(17)
手　七七(40)　一八五(16)
　一八六(19)　一九一(17)
　二〇三(23)
沈默　九七(46)
退社　一六三(44)
轉業　一七九(10)
大衆　一八〇(20)
手眞似　一八一(17)
轉宅　一八一(19)　一九三(20)
高島田　一八一(20)
追悼　一八二(18)　一八三(19)
　一八七(16)
大將　一八三(8)
月見　一八九(19)
停年　一九〇(15)
襷がけ　一九一(18)
手心　一九三(24)
立見　一九四(16)

の更に重大なる國難を知るに到つて、漸く野草食のことなどが事新らしく叫ばれ始めた。野外植物とその食ひ方といつた書物が數種新刊發行された。西洋料理屋の北極星が戰時食糧研究所を設け、野草料理を出す樣になつた。大新聞社が野草食の展覽會を開いた。大阪市の衞生試驗所が野草の分析表や料理法を發表する。かういつた書物、施設は今後益々盛んになるであらう。

野草食に對する管見

過般、庄萬よし氏から北極星發行の「食べられる草木とその藥効」といふ小冊子を賜られて一讀した。百ページ程の袖珍本で、それに食べられる野外草木の圖と簡單な解說と食ひ方が書いてある。極通俗的に書かれてあるから素人向である。私は機會ある毎に人に語り、口演をしたが、今尙ほ野草食の著述を書くに到らない。私はあまり通俗的なものを書きたくなかつたのであるが、今日の場合先づ、北極星のそれの樣なものが出される必要は十分あるし、書籍店の棚にも通俗的な本は二三に止まらず出てゐる。これも無駄なものではない。時に私が思ふのである。野外植物といふものは中々簡單な圖位では始めての人に、直ぐそれと會得が出來ないことである。凡そ毒草でなければ、あらゆる草木食用に供されぬことはない譯であるが、時に毒芹と芹と間違へる樣なことがないとも云へず、よい事を云へば直接人を山野に連れて行き、實物について敎へ指導するに越したことはないのである。

大毎の展覽會を見る

此の夏阪急百貨店で、大毎主催の食用野外植物の展覽會が開かれた。一見して感じたことである。まづかういふ企ては大變結構で、益々盛んに行はれん事を望むのであるがあの展覽會にも種々の實物の腊葉が示されてあつたが、この腊葉といふものなども、生態そのまゝとは色が變つたり植物の一部分だけであつたりして、素人には直ぐに明りにくい感がある。又澤山な原色の繪が出てゐたがこれはあまり感心しなかつた。といふのはあの繪を書いた人はきつと植物學を深く知らぬ人であつたらう。たとへば、ノゲシといふ雜草の繪が、普通のケシによほど似た形をしてゐたしチョウセンアサガホの花が普通の朝顏の花の樣に花瓣が反轉して、ペチニヤ（俗にツクバネアサガホ）の樣になつてゐたこれらは繪を書いた人が、植物の本などを手本にしたので、書く時にその名前に捉はれて、ケシとあるからケシに似た、アサガホとあるから朝顏に似た繪を描いたのではないかと思ふ。

要するに植物は野外に出て實際のものから敎はらぬと中々明確な會得は出來ないものである。野草食研究會とかいふ風なものが盛んに出來て、それに指導者がついて行く樣なことがもつともつと盛んになることを望んで止まない。植物の名を知る。實物を知る。これが極めて大切なことでこれなくては、野草食は徹底しないからである。

尋ね人　一八四（15）
嫁ぐ日　一九五（18）
飛入り　一九七（22）
手當　二〇三（18）
隣組　二〇三（21）　二〇三（17）
二〇五（34）　二〇六（34）
二〇六（36）　二〇六（37）
二〇八（32）　二〇九（34）
二一四（31）
つきあひ　二〇三（19）
炊出し　二〇四（36）
摑む　二〇四（36）
通り拔け　二〇六（30）
鍛錬　二〇七（32）
立讀　二〇九（34）
トリツク　二一〇（30）
時の人　二一一（31）
適齡期　二一二（31）
手相　二一三（30）
天引　二一三（33）

新發賣
消炎鎭痛濕布藥
粉末エキホス
主治効能　感冒、肺炎、肋膜炎
氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎
ロイマチス、神經痛、打撲痛
捻挫等
今般エキホス姉妹品として發賣したる本劑は專らその藥効攷に持續時間の永續に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末濕布藥なり
一、本劑は長時間使用出來るやうに工夫してありますから持續時間は任意にして支差へありません
包裝
一〇〇瓦
二五〇瓦
五〇〇瓦
一瓩
エキホス姉妹品
C-PEJ9

月評 川柳一ト筋

葭乃・紫香・帆船
一笑・香林

年寄りを乘せる車掌の手の温み

（天風）

紫香＝私は此句の内容から來る暖かさと云ふものに感じて提出したのです。然し、下五の「手の温み」と云ふ言葉は昨者もその暖かさを强調させるために使はれたものと思ひますが、少し言ひ過ぎのやうな感じもいたします。

一笑＝最近、親切週間などと云ふものを設けて、ともすれば不親切になりがちな世の中を誡めてゐます。私も屢々體驗することですが、特に車中で不親切にされた時ほど厭な感じのすることはありません。車掌が年寄りを勞はることは位ひは寧ろ當然であると思ひます。それにも拘らず此の句を見る時、一種の潤ひを見つけたやうな氣持がするのは何故でせう。

香林＝下五の「手の温み」は紫香さんのお說の通り、少し誇張に過ぎた感じがします。然し、忙しい車掌さんの勤務に限らず、世の人は皆それぞれの仕事の上に斯うした餘裕を持つことを望んでゐるのです。句の意味から來る暖い感じをとります。

帆船＝「川・雜」の確か前號だつたと憶ひますが「窓」と云ふところで――傷痍軍人や老幼の優先席が出來たが、それに該當する人が座〳〵てゐるのを見かけたことがない。――と云ふ記事を讀みましたがそれを思ふ時、この句にある車掌の如き心持が誰にでもあるなら、今日の交通地獄も多少は緩和されるのでないかと思はれます。

葭乃＝信號が變つて既に發車しやうとする時、慌てゝ乘つて來たお婆あさんに怪我をさせまいとする心遣ひから、車掌が抱くやうにして引ツぱりあげた狀態が此の句で能く判りますが、果して、その時の車掌の手が温くかつたか或は冷たかつたかと云ふことは、作句者即ち傍觀者に判らう筈はないのですけれども、この場合、斷定的に「手の温み」と云ひ切つたのは、車掌の暖い氣持を五音字で表現するための一つの技巧であります。一見、强調しすぎたやうに感じるのも詰り其の獨斷的に言ひ切つた點にあるのだと思ひます。……假りに、下五の「手の温み」を「親切さ」など〳〵幼稚に說明的な字齣を使ふよりは强調してるやうに見えても、此の方がよろしい。

紫香＝成るほど、それで此の句の良さが判りました。これに似た句で「抱え込むやうに車掌……」なんとか云つたやうな句もありましたが、何れにしても斯うした人間味のある暖い句には非常に好感が持てると思ひます。

葭乃＝では此の邊で次へ移りませう。

ねだつてる子供へアレも切符です

（若栄女）

帆船＝衣食生活が凡て切符制となつて以來、切符に關する句は數へきれぬ位ひ發表されてゐます。これもその一つです。そして此の句では、當然子供が玩具か何かを、ねだつてゐるものと想像されるのですが、母親の買はさぬ心理か或は面倒さから「アレも切符です」と簡單にかたづける策のあることを思ひ、又子供にまでも、切符であれば致し方がないと云ふ觀念を持たしめた時勢を思ひ、職掌柄切符には相當惱まされてゐる近來の私にとつて、此の句の手際がピンと來たわけです。

一笑＝私はいま、子供がねだつてゐる物が何であらうかと考へてゐたのですが、玩具ぐらひであれば別に嘘を吐いてまで買はさぬやうにしなくともよい筈だと思ひました。この場合では、假令大人であつても、ヒョツとしてそゝられさうな物でなくては不可い、「アレも切符です」と子供に云ひ聞かせるからには、お菓子とか果物とか云つた風に、餘程苦しい物に違ひないと思ひます。

帆船＝さういふ事も云ひ得られますが、事實切符制の物を「切符です」と云つたのでは句が死んで仕舞ひます。やはり高價な玩具の類であつて切符制と云ふ處へ母親の奇智が働いたものと解釋したいです。

一笑＝それなら、此の子供の齡が問題になつて來ます。私は、街へ出さへすれば何でも彼でも、無闇矢鱈に物を欲しがると云ふ時代（三ツ四ツ）の子供と假定してゐたのです。この年ごろの子供は、切符であらうが、なからうが欲しいと云ひ出すと容易に聞き入れない骨の折れる盛りですから……。

紫香＝私もやはり、お菓子とか果物であると云ふ解釋をしてゐました。「ねだつてる」と云ふ言葉に拘泥すれば帆船さんのやうな見方もあるわけですが、私は此の「ねだつてる」と云ふ言葉には、その品物を限定するほどの强い意味は無いのだと思ひます。何でも彼でも「アレは切符です」と簡單にかたづけて仕舞ふ母親の心理、さうした處に此の句の面白さがあるのだと思ひます……。どうですか、香林さん？

香林＝イヤ、僕は止しときませう。

（註――香林氏は句主の夫君だり）

一同＝どうぞ〳〵。

香林＝さあ……私ン、とこには子供がありませんから怎うかと思ふのですが、丁度一年ほど以前のこと町會の組長常會が終つてから、お八ツの問題に就て、子供が間食に過ぎるので困つてゐると云ふ話が出た事がありました。これは母親として共通の惱みであつたと思ふのですが、此の句の場合も多分、さうした子供の要求を無下にも斷り難い母親としての心遣ひを詠んでゐるのかと思はれます。

馥乃＝私は、ねだつてゐる品物を玩具であると解釋しました。從來、子供に物をねだられて親の困惑した有樣を詠んだ川柳は澤山ありますけれど切符制を此處へ持つて來たのは此の句の手際なのです。そして、切符制を利用した句として其の內容を一層價値づけるためには、どうしても切符を要しない何か玩具の類でもあつた方が良く、亦さう解釋する事の方が川柳の鑑賞法としても妥當であると思ひます。

もう愚痴なことを乳飲む子に聞かせ　（宏　方）

一笑＝少し酷い云ひ方をしますが、どちらかと云へば理性に缺けたやうな母親を詠んだ句であると解します。それも子澤山とまではゆかなくとも三人目ぐらひの子供の母親になつて來ると、よく斯うした型の女性を見ます。乳房を含んでゐる赤ちやんに云つても解らない事であるが、半分は獨り言のやうな愚痴を零してゐるのです。

馥乃＝まあ理性に缺けてゐると云ふことですネ。

一笑＝こんな解釋して叱られまつしやろけど。

紫香＝イヤ別に作者の事ぢやないから……（笑）

香林＝子澤山の人でせう。三四人目の子供に乳を飲ませながら、主婦としての責を負つた母親の口から出たのだらうが、惡戰苦鬪の三百六十五日の間には斯うした事もありがちだらうと思はれます。「もう愚痴な」と始めから云ひ放した處に老巧さが窺はれます。

帆船＝嫌怠期であらうと思ひます。そして此の場合、亭主は不在なのだらうと考へます。若し居合はせてゐるものとすれば、作句を嗜みつゝ女房の愚痴を共に聞いてでもゐるのかと思はれます。女房たるものの子供をあてがはれて、明日の生活を考へてゐるのでせう。

紫香＝「もう愚痴な」と云ふ以上、既に久しい以前から鬱憤があつたか、家庭にゴチヤ〳〵があつたのでせう。また此の句を透して、亭主の操行なり性格が判るやうな氣もします。

一笑＝亭主もさる事ながら、凡そ西も東も判らぬ子供に愚痴るといふ法はない。世の母親たるもの大いに愼む可シ。

香林＝へゝ怖いネー。…（笑聲）…然し、この母親は愚痴を零した事を、次の瞬間に後悔してゐるやうに思はれます。變遷極りなき世の中にあつて、ともすれば崩れんとする心に鞭打つてゐるのではないでせうか。確か五健氏の句に「金言の通りにやると蹴落され」と云ふのがありましたが、この亭主も、さうした正直者であつて、心臟の弱さからツイ損をするので少しの愚痴は出たが、妻として、又母として雄々しく鬪つてゐるのではないでせうか。

一笑＝私は一途に此の母親を憎みましたが、いま香林さんのお說によつて、初めて此の母親の苦みを知ることが出來ました。愚痴を零ほした後でほんとうに悔いてゐるでせう。眼には涙があるでせう。是非さうあつて貰ひたいものです。

馥乃＝この愚痴は家計に對する愚痴か、姑との折合ひの惡さから來る愚痴か、或は亭主の不身持ちを託つ言葉であるのか、その點は如何樣にも讀む人によつて、それ〴〵解釋されて可いと思ひます。

香林＝成る程ね。

馥乃＝この愚痴ると云ふことは感情に富む女性にとつて、一種の慰安ともなるやうです恰度キリスト敎徒が祈禱によつて罪を懺悔して、幾分か心の荷が輕くなるのと同じやうな心理で、この場合の乳呑み兒は母から見れば、一つの偶像となつてゐるのです。此の句を讀むと、家庭を持つて萬事意の如くならぬ女性生活の氣の毒な半面も窺はれますが理性ある頭で考へた場合、なんだか不合理な一抹の滑稽感さへ伴ひます。と云ふのは第三者が考へてゐる以上、本人にとつては乳呑み兒に如何にも判つて貰つてゐるかのやうに愚痴る心狀が眞劍であるからであります。この句と同じやうな滑稽味を感じる句に豆秋さんの「薄情を聖天さんへ告げに行く」と云ふのがあります。これは詰り愚痴を聖天さんへ持つて行つたのであります。

一尺の巾すり抜ける都會ずれ　（勢　三）

香林＝私は阪急沿線に住んで居りますので此の句を讀んだ時梅田阪急前の雜沓を思ひ浮べました。すり抜けたのは三十前後の男か或は若い職業婦人か、作者の氣持は判りませんが、何れにしても人を押退けてゆく都會ずれのした態度を諷刺したものと思はれます見つけどころのある句です。

一笑＝雜沓をすり抜けながら歩くことは都會に住む者のみが知る一つのスリルでもあります。潑剌とした洋裝の婦人であれば、更にその感じが出ます。

紫香＝餘程以前に、心齋橋筋の雜沓を巧みにすり抜けて行くと云ふ馬鹿氣た競走をした事がありましたが、あのやうな所を少しも人に觸れず、而も速かに、グン〳〵と先の歩行者を拔いて行くと云ふことは確かに愉快なものです。

帆船＝「都會ずれ」と云ふ下五に一寸いやなものを感じます。然し他に適當な言葉も見當らぬやうです。

一笑＝此の「都會ずれ」と云ふ表現は、世間ずれがしたとか悪ずれがしたとか云ふ意味のものではありません。此の句の場合は寧ろ適當な表現技巧であると思ひます。

紫香＝一尺が利いてますネ、三〇糎ぢや具合が悪い。

香林＝確かにネ……。實際慌しい都會生活者として、時には一尺の巾もすり抜けて突走る程でなければ義理も立たず約束も果たせぬと云ふ場合が往々にしてあります。然しそんな風にして人にぶつかつた時には「あツ失禮！」と云ふ詫びの言葉が思はず口を衝いて出るものです。この句の場合は、突き當つたまゝ何の挨拶も無く走り過ぎた人を諷刺したものと思はれます。

葭乃＝都會人の氣急しさを摑んだ句です。句沙彌氏の句に「都會人エスカレーターでも歩き」と云うのがありますが都會人といふものは兎角頭のみ先走りし勝ちなもので、仕事に忙しい人ほど、一ツ時の間も凝つとして居れない性能を持つてゐるものです。よく郊外電車などに乘つても見うけられますが、降りるべき驛が近づくにつれて、電車の走つてゐる間ももどかしいのか少しでも改札に近い車輛へと歩いてゆく人があります。斯う云ふ性格は長年都會で苦勞してゐる裡に、何時とは無く培はれたのでありますから、結局下五の「都會ずれ」と云ふのは適切な用語であらうと思はれます。

帆船＝成る程、都會馴れでは弱いですネ。然し「ずれ」そのものが少々悪く響くのか、此の句の損であるとも思はれます。

香林＝然し此の句では、突き當られた方の悪い感じを表現しやうとするのだから、やはり「ずれ」とした方が意に適つてゐますネ。

我が子等よいびき安かれ　征く日迄（さらばだ）

葭乃＝此の句は非常に親の情愛の出てゐる句です。勿論、「我が子等よ」と云ふのは男の子を指して云うてゐるのであつて、ひとたび母の胎内を出ると男子である以上、既に大君の御楯であります。三ツの子、十五の子、八ツの子――と頭を並べて、すや〳〵と眠つてゐるさまを見て、感じた句であると思ひます。「いびき安かれ」と云ふ句意には嬰て出征の日が來るまで日本男子として恥しからぬ健康に惠まれて欲しい、且つ精神的にも幸福に過して欲しい、と云ふ親の心持ちが含まれてゐます。

一笑＝私はまた逆に考へてゐました。「我が子等よ」と云ふからには、もちろん女の子もあれば男の子もあり、亦乳呑み兒もあることゝ思つてゐました。それで「いびき安かれ征く日まで」と云ふのは父親の子供に對する情愛であつて、自分が征つた後も、なほ健やかに育つていつて呉れよと念じてゐる氣持までが讀み取れるやうに思ひました。少し獨斷的な考へ方ではありますが、或は既に、此の父親には召集令が來てゐるのかも知れません。さうであるとすれば、此の子供等の安らかな寢顔も後二三日で見納めとなるかも知れぬ、と云ふ切實な情愛が窺はれます。

紫香＝私も一笑さんのお説の通りに感じました。それに子供等は病身なのではないかと思ひます。せめて自分の征く日まで、厭な氣持ちは味ひたくない、と云ふ心境を端的に表したまでゝ、所謂、後は野となれ山となれ、と云ふのでは毫頭ないと思ひます。

香林＝此の句は「いびき安かれ」がよく利いてをります。子供は何れも男の子であると思ひます。子供に對する父母の情愛が、心憎いまでに親はれて、好きな句であります。また徴兵檢査までには強い日本男子として大きくなつて呉れることを、唯一の念願としてゐる心持ちがよく出てをります。母親の氣持にも、我が子を御國に捧げる尊い覺悟があります。

帆船＝「いびき安かれ」は勿論、健康の事を云つてるのでせうが、強ひて、子供等が病身であると解するのは怎うかと思ひます。何故なら、「我が子等よ」とあるからには一人や二人でない事は明かであり、その中には多少健康な子供もあつて然るべきであるにも拘らず、同時に此の言葉は數人の子供へ一樣に呼びかけてゐるからであります。……それから、解釋の困難さは「征く日まで」と云ふ下五の裡にあるのだと思ひます。

香林＝私はこの句に就て、餘り複雜なことを考へたくありません。即ち、此の句意を其のまゝ言ひ換へて「我が子等よ、入營するまで健やかに」と云ふ程度に解釋し、其處に表れた親の心情を汲みとれば足りるものと思ひます。

葭乃＝結局この句では「幸福であれ」と云ふ抽象的な意味を「いびき安かれ」と具體的に表現し得てゐる所が山です。然し下五の「征く日まで」と云ふ語句の意味が限定されてゐないために、「父が出征する日まで」とも「子供等自身が征く日まで」とも二樣に解釋されるのです。そして其のどちらにしても句としての内容を具へてはゐるのですが、大體、一つの句に二つの意味がとれると云ふことは、そのどちらか一方が作者の意圖に反してゐることは明らかです。これは表現上に缺陷があることを示してゐるのですから、その點再考の餘地があると思ひます。

新會員を募る

松坂倶樂部　川柳講座

▼戰時生活下の常識として川柳を知りたい人▼人間陶冶の詩として川柳を創作したい人▼從來作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋（日本橋筋三）の七階にある松坂倶樂部の麻生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後二時から新形式によつて開講（作句・添削批評講義等）會費一ヶ月一圓。入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。

（川柳講座幹事）

川柳 世界史 (XXI)

戸田孤篷

(二八) 科學拾遺 (2)

トリーチエ

十米以上の所へはポンプは上らない。大氣壓力と云ふものを知らない人々は神樣の氣まゝだといつてすましてゐた。低氣壓、高氣壓の基礎になる七六〇ミリの氣壓をはじめて實證する。

水銀が昇りつめると朱筆持ち

ゲーリツツ

直徑三十糎程の御椀（半球）を二つ合せて空氣を拔くと双方八頭の馬でようやくはなれたと云ふ氣壓の實驗をしたマグデブルグの名市長。

まだ馬がたらぬと市長御注進

ボイル

空氣はゴム球みたいに彈む。體積と壓力とは逆比例する。夢の如きデモクリトスの元子論をものにして近代化學の開祖になる。鹽と水を混合して低溫を作ることも知つてゐた。

アイスクリン屋ボイルの名前など知らず

フック

顯微鏡の發明家、最初のほどは一枚レンズの虫眼鏡の方がよつぽど便利だつたらしい。だが少し見え出すと手あたり次第にのぞいて、コルクから細胞を見つけ出す。

細胞の數をきつちり先ず數へ

レーベンフツク

レンズ磨屋出身で顯微鏡にこつた一群のうちの人々、ローバートフツク以上の觀察をやり微生物の存在をあきらかにす。

檢鏡圖圖案にしたいのも交り

ニユートン

林檎のおちた話は眉つばものらしい。物理學者、大數學者、俺の知つてゐるのは眞理の砂漠の砂の一掘りだと云ふ謙讓を持ち合せてゐた。

本人の知らぬ爭ひまだつゞけ
ニユートンは林檎の話など忘れ

リンネ。

たゞものを並べるだけでも頭のよし惡しがきまる。數十萬種を部、門、綱……と根氣よく續けてゆく

分類齊願大きな戸棚一つ買ひ

フランクリン

紙鳶上げなら俺でも出來ると云ふ勿れ。得態の知れぬ雷とと組み合ひをして遂に避雷針をこさへ上げる。

紙鳶上げはひとり殘してみな歸り

アークライト

ビーピーピーの絲車の手職を失業させ、文明開化の人力車と巡航船と喧嘩した樣な笑へぬ場面を無數にくりひろげながらイギリス、產業革命の花形にすはる。

親方はアークライトを恨み死に

キヤンベンデイシユ

ターレスは水を萬物のもとゝいつたがこの水を酸素と水素を結びつけてこさへ上げた男

H_2O お手のかゝつた水が出來

ラボアジエー

二に二を加へれば四である。三にはならぬ。燃えると個體であつたものが氣體にかはるだけ逃がさぬ樣にして目方を量れば依然として四は四である。之を物質不滅の法と云ふ。

天秤は油をさしてしまひ込み

ハーシエル

いゝ妹が居つて勉強の最中には御飯まで口に入れてくれる。兄と妹二人がかりで、太陽の遊星として地球、木火土金水星の外に天王星を發見する。

妹にものぞかせそれから名をきめる

ワツト

ニユートンの林檎の如くワツトの蓋をもち上げる鐵瓶の油氣もどうやら作り話らしい蒸氣機關はその當時出來てゐて、その不完全なとこを改造して使ひものにしたのがワツト。

そろばんに合はぬ仕事のやめられず
發明發見まだ修繕が出來ません

院長 醫學博士 井尻辰之助
泌尿器科 皮膚科
華陽堂病院
大阪市南區千年町（島之内警察署横）
電話南㊱四四七五・二一八五番

近作柳樽

路郎選

贅澤な煙を殘し敵沈む　大阪勢三

龜のオツパイは何處かと子に聞かれ　同

ビール飲む列憂國の志士居るか　同

音樂の趣味が昂じて嫁きおくれ　同

御主人の趣古はカメラが旅をする　同

女事務鏡と共に家を出る　同

教養の高さ鏡に無愛想　同

週報の記事初めから擊滅記　同

休閑地皆たべられるものばかり　和歌山　宏方

上役にもう凡才と認められ　同

深窓の人も出て來た休閑地　同

增產を心得たとは鷄云はず　同

刺身するやうに點數切り取られ　同

來年へ後四時間の風呂の垢　大阪　博也

散髮を出たら晦日の風だつた　同

伊勢參宮を思ひ立ちて

五十鈴川やはり昔のつめたさに　同

お天氣だつただけの正月すんじまひ　同

宇治橋で友と並んだいゝ寫眞　同

爪彈の街へ這入つた歩きよう　大阪　詩朗

うつかりと双子の一人とも知らず　同

其の昔長屋住居の社長なり　同

元旦の國民儀禮醉うてゐず　同

姉に似て愛なき人を思ふ身か　兵庫　花子

ねたみ持つ娘ごころの淋しさよ　同

琴彈けば琴の調べのなかに君　同

双親のこゝろに添へぬ不倖せ　同

文展に芝居に京はよい處　西宮　寒草

八ツ折の音して歸る軍需工　同

生活費いよ〳〵かさみゆくらしま　同

龍頭卷き乍らウオルサム自慢する　同

日本の靜けさ思ふ吊し柿　神戸　美水

子が振つた目の丸がまだ目にのこり　同

煤けたる居間に殊勳の額光る　同

出發へ來る人が來てまた嬉し　同

○○○陸軍病院に友を見舞ふ（二句）

片腕を蠅一匹にあなどられ　比島　要兒

まどろめば右腕今も敵を擊つ　同

オヒサマが好きな土民の鼻の穴　同

夕空の下で濠洲墓穴掘る　同

魚釣りは見てゐる方が短氣なり　横濱　楓萊

最合傘雨がやんだに氣が付かず　同

御立派な最後でしたに母むせび　同

いゝ嫁は姑を手持無沙汰にし　同

雜草へ孤獨かこつか月見草　尼崎　正二

なまじつか文化に觸れた生活苦　同

生產へ唯もく〳〵と吐く煙　同

神前へ明日征く人のたくましさ　大阪　秋子

母一人だが壽忠の二字に征く　同

捨てられた小猫の樣に二號居る　同

歸らじと出て征く兵の眉黑し　大阪　蜜彥

桃われの乙女の夢よくづれるな　同

手を擧げた中に吾が子も交つてゐ　同

白粉のよしあしこぼす顏じやなし　京都　春涉

葬具店悲しい事を待つやうに　同

氣の毒な程女房に意見され　同

ワテが避難だつかと老人笑はする　大阪　美奈子

抵當に入つてる家でかくれんぼ　同

むつつりのとこまで親に似てゐます　同

値を聞けば公定ですと渡船　布施　輝親

電話口お酒持參で頼みます　同

來客の馳走は炭を足した丈け　同

結婚十二年初めて兒をもうく

わかりけり一茶の喜びおらが春　大阪　佳春

おそ生れくしや〳〵顏で二ツなり　同

値を覗かれ〳〵メロン賣殘り　同

診察室世帶の愚痴も聽てやり　奈良縣　カズヱ

オーバーに刷子かければ主婦に似て　同

レントゲンで見ればあはれな御令孃　同

張切つて歩けば冬の風もよし　大阪　茂路

小休止たばこ吸はねば損のやう　同

色々お世話でしたと辭めるらし　同

近視の客が去んで錢湯しまひにし　神戸　小城子

今度目は女でもよい子澤山　同

正月を寢る子へすまぬ嘘をつき　同
屋臺店湯氣の中からつりを出し　大阪　春童
トンネルを出れば赤松續いてる　同
つぐ前に解説のあるウイスキー　同
戰場を偲べと寒い月が冴え　尼崎　利一
模型機の墜落水に濡れたゞけ　同
尊とばれ勞働樂でない生活（くらし）　同
又一つ本箱が要る年となり　大阪府　鷹丸
米位ひかつぎますよと會社員　同
米一俵かつぎ甲種の夢をみる　同
本當の事が言へない母思ひ　愛媛縣　曉明
慰問文兵隊さんをゑがきつゝ　同
木枯へペタル戰地のしのばるゝ　同
日本髪大和撫子こゝにあり　滿洲　猪三郎
着任の一聲記者は待ち構へ　同
征つて來るたゞそれ丈の頼もしさ　同
桃山人形淋しくなつて灯を點す　敦賀　柳之助

北陸點景

雪國の此の濱町の三味を聽く　同
雪國の生れと云うて、泣き黑子（ほくろ）　同

觀兵式御臨幸の御影を拜し奉りて

おろがめば御影に戛と蹄鳴る　德島縣　太朗
寄宿舍の窓の一つは鄕愁へ　同
田舍バス是非に頼むがブラ下り　同
先生の若さ帽子に紅葉差し　名古屋　秋暮
菊好きで駐在所中菊にする　同
交通巡査人の渦中に巍然たり　同
忙中閑コンパクト出す女事務　神戸　久枝
燃えるよな色で出社の女事務　同

十二月三日

食膳へ突如軍艦マーチ鳴り　同
交換放送こちら朝です鷄の聲　松山　鷄城
豆をいる音も春です農家ひま　同

幼き從姉妹死す

人生のはかなさ化粧してもらひ　同
看護婦のものさし一寸世帶じみ　大阪府　庸司
電線へ雀ホ調のドドミソド　同
門松の脇で火叩き部署につ　同
待たされて眼は應接の蠅と居る　同

義弟召集を祝す

今日の日を待てり三十二の血潮　同

義兄長男の死を悼む

かうやつて遊んで居つた三輪車　同
幕開けば舞臺から來る寒い風　大阪　青々子
銅像も御役にたつ日雲はれて　同

某月弟軍屬として征く

今頃は椰子の木蔭で餅燒かん　大阪　彌生
組長に良いオ祖父さん字が讀（よ）め　同
配給の酒神棚で年を越し　松江　祥月
阿呆らしい顏ばかりなり朝の驛　同
日本髪明けて今年は二十一　松江　初惠
未亡人再生コート着て出かけ　同
桃割れに結ゑ見合の日もせまり　大阪　風柳
引越の車焚火の上を越へ　同
此頃はのこりませぬをうたが（はま）　廣島　露斗

一畑寺にて

盲目の母だがお水もろて行こ　同
元旦の神棚ひしと胸に入る　津山　蛙柳
初雪の白さばかりが暮れ殘り　同
初月給躓く丈けはせず戻り　廣島　可學
かこひもの師走といふに夫を連れ　同
訂正の戰果は又も喜ばせ　大阪府　雀草
百貨店切符がないで素通りし　同
灸のあと風呂屋へ持病さらだし　大阪　照二

新聞小說を見て

九軍神中の一人は戀を捨て　同
落魂の一家に惜しい鳩時計　西宮　萬龜子
凧昇げる糸へ點數無心され　同
新しい年だ爆音先づ聞いた　東京　凡平
初詣で産業戰士脚絆で來　同
母の愛炭燒く村の假名便り　大阪　掬夫
五百點貰ふ屆けも嬉しくて　同
今日よりは座して食ふこと念ふまい　大阪　實穗
特配へもう手を附けている世帶　同
子の智慧を樂しく聞いた夕の膳　東京　一鉢
外人の顏が近頃馬鹿に見え　同
マヽゴトの砂に外米内地米　山口縣　美沙女
配給の列で特効藥をきゝ　同
白粉を塗れば市川羽左衛門　安東　秋人
脈搏の數新聞へ載る偉さ　同
銃後まだ惠まれてゐる日向ぼこ　大阪　風情
忌中札月當番の家でした　同

この次に逢ふ日は髭を立てるとか　島根縣　弘樓
金鵄持つ友で園碁にも又強し　同
表彰を固く斷はる苦勞人　大阪　智子
家計簿の話は子供寢せてから　同
どなたへの千人針か暮れて去に　大阪　ひさみ
戰勝の春だタイプを強く打ち　同
わに皮の夢も捨てたと二十七　大阪　延枝
紅く染めうつむくことをもう忘れ　同
防空へこんな姿も笑はれず　丸鯏　浪二
よその子の頭を撫で淋しがり　同
空襲定刻ですと馬車の出る　島根縣　秀香
轉業の跳足何かを踏んだやう　同
年寄がゐて豆炭を大切がり　大阪　千斗
母親になれと出戻りすゝめられ　同
さようなら障子のきわでたたずみ　大阪　忠一
ひじ鐵は連にも物をいはぬなり　同

農村新年

歌かるた今年は戀でなかりけり　大阪　葉光
勝つ爲めに街も大根を干し竝べ　同
大同の佛休憩してる顏　東京　士節
奉戴日心のネヂを掛ける日ぞ　同
寒釣のタバコは馬鹿な眼で見られ　名古屋　勿來
十二月女のぐちが多すぎる　同
夏の涼しさ話して寒い大伽藍　京都　默魚
僕達の頭數まで叔父はのみ　同
潤ひを職場に見せる植木鉢　東京　青衿子
眞黑に餅が焦けてる子の遊び　同

傷兵に熱海は早い梅が咲き　神戸　蘇軒
決戰が濟んで暫く燃える海　同
耐え行きてほゝ笑む日母の道　津山　菁紅
時計臺心忙しい街に住む　同

白姓

あれれれ稻の穗が一つ落ちてゐる　島取縣　綠柳
うふふふ仲が伍長に成りました　同

社内趣味展

趣味展に自作の湯呑一つ出し　西宮　公子
清潔に出來さうにない子澤山　大阪　照弘
亡き祖母の肩細かりしきり炬燵　大阪　幹子
勝つた事にして米英はふれまわり　大牟田　逸桂
喧嘩しても姉は湯たんぽ入れてくれ　大阪　正朗
横座りに女は窓に肘を突き　奈良　晶平
人道を無視し子の爲席を取り　尼崎　正路
月並な娘にされてゐつゝ無事　大阪　千代
黑インキ置いて代書は忙しい　大阪　一環
警報も出ず元旦の餅の味　大阪　三丸
釣れぬ日は沖の白帆も眼にとまり　香川縣　平石
初空の爆音聞いて餅を食ひ　大阪　白水
編隊機菊晴の空南方へ　大阪府　仙人
枕邊のみかん淋しく咳込みて　尼崎　笑月
生きるのだ大地にしこを踏んで見る　大阪　迷
淋しきは上手に嘘をついた後　西宮　甲東
虎造が寢床で聞ける部屋をとり　大阪　定七
餘裕ある姿劇場前の列　大阪　若栄女
女事務かゞみ見るのも事務のうち　大阪　一鐵
掘起せ銀次郎位の入も出よ　諏訪　臥牛

運命を知る女なり泣きません　津山　燦太郎

陸軍○○飛行場見學

軍神室恩師しのぶか案内者　大阪　正太郎
空襲のゆめなど見てゝ春しづか　大阪　一昌
新穀へ感謝の庭にみかん熟れ　池田　良
花生けるひまもあるなり古本屋　大阪　富美
英靈の墓地清淨の雪積る　滿洲　錦風
公衆電話へ娘につこり振返り　津山　窓風
歸還待つ僚機にふえる星の數　朝鮮　幸士
交代を待つて子持ちは早く去に　大阪　英雄
口と手と足と女工の三拍子　島根縣　朴泉
九軍神をはつきり拜む紙芝居　松江　川魚
遠征の吾れも驚く髭が伸び　松江　傳七
支那服がいたについたる宣撫班　松江　額光
馬鹿になる日もあつてよし宣撫班　松江　九紫
遠征のおかけマレー語覺えたり　松江　五虎
㊙で稼ぎ㊙ばかり買ひ　高知縣　神樂
聞く丈は聞いてをかうと應接間　高知縣　夢女
簡素化へ古い着物も染め直し　出雲　甫光
逞しい意慾で越えた野の廣さ　京都　宕川
サラリーマン暮待ツ心只一　朝鮮　茂
決戰下あの町この町夜業の灯　名古屋　ひろし
叱られた小使室の南方論　滿洲　しけを
マライ戰記心吸はれて汗も忘れ　兵庫縣　葛藤
初風呂で東條さんを褒めてゐる　大阪　松南
模型機へ親も一緒に竹をまけ　京都　祇童
夕富の中に吾家を見出しぬ　大阪　白路
冬休み献上學徒は荷作りし　大阪　泰彌

同舟近詠

松山　前田五健

親が起き子が起き無事なお正月
謠曲のよく現はれて問答し
お經かいなんの謠曲にて候
不勞所得回轉椅子が知つて居る

町内會長と成りて

歳のせい町會長に擔がれる
水鳥のぽつん〳〵と居りは居り
雪らしい冷えじや、ナモシと炭をつぎ

金澤　安川久留美

藁塚の雪矢ッ張黑い鴉の目

仁川　池田可宵

火種から火になる迄を語り合ひ
つまづいたとこが煙草の捨てどころ
出盛りを目がけ二月に近い雪

旅

旅へ出てオット點數無い身なり

兵庫縣御影町　長崎柳秀

少年工火花の中に必死なり
腹の立つことまで書けぬ告知板
上陸は友機の護る下を行き
米、英の様な奴だと怒らはり

田舍歌舞伎（六句）

姫路縣穴吹町　田夕鐘

蓄膿の臺詞ですます重次郎
吹けば飛びそうな熊谷があらわれて
敦盛が三十五六に見ゆるおかしさ
興市兵衛死そうでない腰の線
道行の勘平さんのまづい顏
配給ほどしか醉うてない由良之助

今治　長野文庫

個人的由緒を茲に揚棄する
打ち返す波もゆるさぬ大日本
幾とせを經ても雜草變りなく
子澤山配給の日に羨まれ

滿洲　橋本克海

新入値眉の太さが賴母しく
黑い雪なども降つてる北滿に
越境の噛にぽつちりとソ聯の灯

奈良縣龍田町　嶋田翠峯

がら開きの汽車もあるなりお元日
たくらみの中で醉つたが落度なり
大根を屋根まで干した隣り組

長野縣須坂町　高峰柳兒

土産屋が相談にのる子澤山
丸刈で上役若さ漲らせ
陣頭指揮畑違ひの細い指

福井縣　村田眉丈

ガダルカナル胸に痞へて醉（屠蘇）
牧場の牛にも時局犇犇と
公會堂けふは理髮屋さんの會
腹掛のアルミ一銚子に足らず
外科醫局けふは幾人切る話
ウキンドに「あるけ歩け」を靴屋貼り
アパートをホテルと思ふ國の母

急性・慢性
化膿症に
本劑は品質至純なる二基ズルフォンアミド劑にして、內服により化膿症の病原菌克服作用を發揮す。
故に、患者の苦痛とする化膿・疼痛・發熱等の症狀消退迅速にして短期間に根元的治癒を促進せしむ
淋疾・婦人科化膿症
外傷化膿・丹毒・面疔
齒槽膿瘍・眼瞼炎
中耳炎・扁桃腺炎
包裝二〇錠・五〇錠・一〇〇錠　金鶴藥店に有
製造元
山之內製藥株式會社
東京・大阪
YAMANOUCHI
アルジルフ錠
OP—17

語源覺書（二）

淺田一

方角の名。 東西は世界の多くの國で太陽の出沒に關係した名を附けられてゐる。わが國のヒムカシは日に向うた方向の意、（中島利一郎氏說）だと思ふ。シを「風」だとする說もあるが南北にシがつかないから方角（大陸方面の語にも類語あり）と認めたい。琉球は我方言に過ぎないが東をアガリ、西をイリといふ。ニシは內地では西だが琉球では北である。金澤庄三郎博士は「往ニシ」から來たもので我國祖先の主流は西から東に向つて進み、琉球氏族は九州から南に向つて進んだから、過ぎ來し方を「往ニシ」「ニシ」と稱するに至つたと說かれる。中島氏は朝鮮でニシは主だから主即遠祖の居る方向ニシーシから來たと云はれるが、僕は金澤說に從ひたい。オリエントは登る意オクシデントは落ちる意、イーストは「曙」ウエストは「夕方」と關係がある。北は蒙古で「コイト」、ウイグルで「コト」といふのと關係深く、コチは東北風から東風となつたのではあるまいか。ノールは岩石の意で、岩礁多き北海を指してノースとした。サウスは太陽サンから來た。ミナミは南の支那音だが、アイヌ語ミナは笑ふ、樂しむにも關係すると思ふ。琉球で南フエーは南風（ハエ）から來てゐる。ハヤテの意、暴風は南から主に來る。

蜜月の由來。 蜜といふコトバは梵語 Madhu に初まり殆んど世界同系語である。馬來（マーヅ）、廣東（マート）、支那（ミー、昔はミツ）、朝鮮は（ミル）、日本（ミツ）、ロシア（ミョト）、ポーランド（ミエード）、ボヘミヤ、ボスニヤ（メード）、洪牙利（メーツ）、ギリシヤ（メーツー）、ラテン（メル）、スペイン、ポルトガル、スコツトランド（メール）、イタリヤ及ルーマニヤ（ミエーレ）、フランス（ミエル）、ドイツでは蜜酒をメート、英語でも之をミードと呼んで蜜そのものはドイツ（ホーニヒ）、英國（ハネー）蘭（ホーニング）、那威、丁抹（ホンニング）、瑞典（ホーヌング）、芬蘭（フナジヤ）といふが此系統はギリシア語で黃色を意味するクネーコスから來たらしい。この獨、英、スカンデイナヴイアを除いては殆んど凡てミツ系統だから面白い。スコツトランドの古い習慣で結婚するとミード即蜜酒を一ケ月間飲んで遊びまはるといふ。だからミードモンスともいふべきだが之がハネムーンと云ふに到つた。尤も玉兎の月と年月の月とをムーン、モンスとわかつに至つたのは割合新らしい事で昔はどちらもムーンであつた筈だ。

日本などは今昔兩者共通だが別段ヤ、コシイとも感じない。こんな馬鹿々々しいコトバのホンヤクはなくもがなだ。

貨幣の名。 圓は圓いからだらう。兩は金の量目の名で量と同音だからでないかと思ふ。テールと讀むのは外人の勝手な呼稱である。そのもとはドイツのボヘミヤの一農村ヨアヒムスタールのシュリツク伯が十六世紀の頃自分の鑛山で銀貨を作り、ヨアヒムスターレル、グルデンと云つたが、長過ぎるのでターレルと略稱されたことに始まり、之がテールとなりダラーとなつた。グルデンはゴールドから來た名で、ギルダー亦然りだ。ポンドはラテン語で量ると云ふ意、ペソ亦同じく量られしものの意。マークは印で國印のある貨幣を意味し、バーツは泰語で足の意だ。オアシが泰ではそのまゝオカネだ。イタリーのユーノ、モネタ寺院で鑄造されたものがイタリア法モネタ、英のマネーだ。加工された銀を意味する梵語ルーピヤーから印度のルーピー、ソ聯のルーブルとなり、中島利一郎氏に依ると女眞語アルチユンが阿堵物で、ツングースのアルゲゲンが鷲眼、之を音に無頓着に略して鳥目となつた。

鹽。 シホと云ふコトバは世界の大部分に於てSと云ふ音を持つてゐる。ラテン語を始め、スペイン、ポルトガルで Sal イタリアで Sale 英、那、丁、瑞 Salt 獨 Salz ソノ他バルカン諸邦、ソ聯でも Sol 又は之に似たもので、芬蘭でも Suola 洪牙利、ボスニアではソー、アイヌではシホ、朝鮮ではソコム、マライやタガログでアシン、蒙古では潮がスメで鹽はダボンである。ギリ

募集句

一路集

榮轉

榮轉は唯〇〇とあるばかり　青々子

榮轉と共に息子の嫁も取り　秀甫
榮轉の廻轉椅子がよく廻り　正二
仲人も二つ三つして榮轉し　さわだ
後任も榮轉組の顏で來る　彌生
榮轉に借物でないモーニング　猪三郎
榮轉が無沙汰詫びにやつて來る　白路
單身でゆく榮轉に覺悟あり　亞人
榮轉を氣强い母に勵まされ　葉光
榮轉をあやかる盃もらふなり　英雄

シアでハルス、蘇格蘭でハーレン、獨乙、バルカン邊のハール、ハーレなどのついた地名は岩鹽と關係があるさうだ。鹽素弗素などハロゲン元素といふのは此のハルスから來てゐる。支那の鹽や、は岩鹽から來たらしく語源的に別派である。所で日本のシホは海のシホから來て居り、ウシホは大（ウ）シホとする人、動（ウ）シホとする人がある。アシンやシボと關係があるらしいが、どちらからどちらへ移つたかわからぬ。日本ではこの潮の干滿が著しい上、毎日反復するからシホ（機會）、シバ〳〵（屢々）の派生語を生じた（松岡靜雄氏）英語では潮 Tide と云ふコトバが蘭では Tijd（タイドとよみ、「時」の意）獨の Zeit となり、潮が我國の雁のやうに便りを持つて來るので Tiding（英）——Zeitung（獨）新聞と云ふコトバが出來た。日本では潮氣は雨氣を意味し、海のシケルといふのはシホケから來たと私は思ふ。シホタレル、シボル、シボムなどシワ皺から來たといふ說が多いが私は之も鹽に歸因する樣に思ふ。シホがシロから來たといふ說があるが寧ろ逆であらう。シロは古朝鮮シヨラとも關係があるやうだ。

心。希臘で Kardia ラテンで Cor（羅格 Cordis）伊で Cuore、佛で Coeur だが獨ではCがHに變り Herz 蘭で Hart 英で Heart となつた。マライでハチといふのも關係があるかも知れぬ。Cの發音がS音に讀まれては露のシエールツエを初めスラーヴ族の諸語がある。之とは別に支那のシン、西藏のセムがある。西藏で思ふはサムでアイヌでもサンベだが朝鮮では心をマウムといひ、我がオモフと關係がある。偖ココロはラテンのコールに似て居るが之は偶然の一致で我國の心は伴信友の云つた樣に腹中に凝りしものの意でムラギモノといふ枕詞のある所以であり、胎兒をミコ、ロといふも此爲だし、凝つた太いもの即心太（コ、ロフト）が訛つてトコロテンとなつたとは新村博士の說である。所で朝鮮語でコールは腦のことでアイヌでも腦をケオロといふが我國には腦といふ固有語は無い。然し之等は我が「凝る」から出てゐるのであるまいか。

目。メは芽なりとよく云はれてゐるが、西藏でミキと云ひマライでマタといふ。朝鮮はヌンだが mi-n とはよく轉呼される。メはマとも云ふが目上毛がマユゲ、目の子がマナコとなつた。之は本來瞳孔（ヒトミ）の筈だ。ヒトミは人の形が映つて見えるからいふ。漢音モクも同系だらう。

＝筆者は法醫學の權威醫學博士＝

榮轉と云はれ停年近づけり
榮轉はわざ〳〵國へよつてゆき
榮轉と云つても祖母は涙ぐみ
榮轉の抱負を語る顏が載り
榮轉の先は煙の都です
榮轉を圍めば苦學の日も語り
榮轉で初めて知つたかくし藝
榮轉へ陽氣な友がたづねて來
榮轉に子の轉校がついてくる
榮轉の車窓に日本一の富士
榮轉も左遷もされず生き辭引
榮轉の部長をかこむ最後の日
榮轉へ事務引繼の忙しさ
榮轉へ南洋の地圖ひろげたり
丸刈でくる榮轉は親しまれ
榮轉と偉さを顏へ表はさず
榮轉の噂してみる年の暮
榮轉がもう億刼な五十代
歲取つた事榮轉に考へる
嬉しさかくせず榮轉々々と書き
錢湯で榮轉話を聞かされる
火叩きも榮轉の荷と共に行く
榮轉は先づ一人來て事務を繼ぎ
乘り物に弱き母あり榮轉す
同輩の皆へすまなく榮轉し
(佳)榮轉の言葉門衞へも殘し
(同)榮轉は當分狹い家で住み
(同)榮轉を祝うてくれる父母もたし
(同)榮轉の蔭に苦しい世を渡り
(軸)榮轉を送る飛行機圍むなり

カズヱ
佳春
凡平
朔郎
照弘
照二
勢三
忠一
平人
千斗
曉曉
初惠
祥月
神樂
美奈子
正太郎
美水
正美
治男
祇童
潮流
征曉
宗山人
菁紅
楓萊
三丸
蜜彥
夢女
青稔子
綠雨

國訛豆秋選

ヨカ〳〵とお國訛で賞められる　牛步

愛嬌の一つにもなる國訛
國訛笑ふ譯にはいかぬ也
九州の何所ちやと巡査の國訛
在りし日の父の訛を思ひ出し
ひら假名で母の手紙の國訛
大臣も幼訛りがまだぬけず
國訛出して班長叱つてる
母の出す便り訛のまんま書き
國訛眞似て巡査は調べてる
國訛そのまゝ小孩覺え込み
少年工お國訛で寮に居る
先輩の意見嚴しい國訛
モシ〳〵へ要領を得ぬ國訛
愛嬌の一つ女給の國訛
一徹の夫に拔けぬ國訛
道開けば同じ訛で敎へられ
久しぶり汽船の中の國訛
一言の國訛から足がつき
國訛兒は笑はれるのがけせず
怒つてる樣に鹿兒島辯が居る
慰問隊のお國訛がなつかしい
國訛豐作語る人があり
軍服をぬいでとび出す國訛
お名所を訊けばやさしい京訛
(佳)國訛故鄕の良さが滲み出る
(同)國訛一旗擧げにやつて來る
(同)國訛夜汽車の隅で聽いてゐる
(同)大膽に放送をする國訛り
(同)お目出度い席の上座に國訛り
(同)國訛何かうれしい三等車
(同)國訛あつて日本强いなり
(同)くに訛うれしく母の肩をもむ
(同)國訛千日前で掏られたり
(軸)出帆はお國訛に送られて

楓萊
葛藤
青々子
錦風
彌生
雅幽
青洞
實穗
甲東
三丸
勢三
天風
佐八郎
祥月
周峰
神樂
夢女
正美
慶一
正太郎
祇童
美奈子
菁紅
猪三郎
一笑
カズヱ
葉光
英雄
青稔子
菱三
美奈子
千斗
豆秋

うたがりあ！んさ隊兵

大東亞戰 滿一周年記念 川柳大會

主催 川柳雜誌社

★ハワイ眞珠灣に戰史未曾有の大戰果を擧げ大東亞戰の火蓋を切つて以來早くも滿一周年を迎えた我等柳人はこれを記念すべく、師走十四日夕刻より戰神御津八幡宮紀務所に於て田中風葉氏司會の下に師走川柳大會を擧行した★十一日開會のところ、警戒警報發令のために、俄に十四日に期日が變更されたのと、開會時直前までの雨と寒さに、出席率が氣づかはれてゐたにもかかはらず、開會前既に滿員の盛況である。大會役員をはじめ各支部代表戰士が柳友間を縫うて右往左往、大會氣分はいやが上にも盛りあがる★先づ國民儀禮をもつてはじまり不朽洞會委員長戸倉曹天氏おもむろに起つて、大會開會の挨拶次いで席題の作句三昧に入る★作句を締切つて、戸田孤蓬氏作の紙芝居「大東亞戰一周年」に氣分の轉換、兼題の披講、某人氏の「戰爭の句に就て」の講演、席題の披講、路郎師の「十二月八日」と題する感激的講演があつた。續いて川雜各支部對抗句戰が華々しく展開されて銃後柳人の國心と明朗さとを遺憾なく發揮した★次に句報並びに對抗句戰の概況を傳へることとする。

兼題 軍神 緑雨選

軍神の英姿繪になり 像になり 示子
軍神の癖まで眞似て 子は遊び 至藝瑠
そのまゝと軍神の母 寫される 三司
軍神に胸をうたれつ 遺品展 豐子
絶筆となり軍神の 荷が屆き 鮎美
軍神の母はモンペで 撮される 豆秋
軍神の耳轟沈を たしかめる 虻蜂
軍神と共に輝く 日章旗 輝拳
いくらでも軍神の出る 有難さ 紫香
軍神へ誓ひを立てゝ 勇み征く 文八
軍神の話炭火も 勿體なし 某人
日本兵みな軍神になりたがり 香林坊
軍神に手向ける地圖は 塗替へて 艸樂
軍神の遺兒へ首相話しかけ 紀川
(五)散に行く日も軍神は酒落を云ひ 春巣
(五)軍神の生家は赤い屋根でなし 普天
(五)軍神の母は安堵の胸を撫で 乙平
(五)軍神としての我が子に合掌す 水客
(五)軍神の傳記男の子に聞かせ 拳光
(人)孝行もして軍神は花と散り 美知夫
(地)軍神を祀りすく〳〵兒は育ち 吐空
(天)軍神の母つゝましく笑ふのみ 柳太
(軸)軍神の感激東亞だけでなし 緑雨

兼題 遠征 丹路選

遠征の朝を九段の砂利の音 泥柳
遠征又遠征と髣髴がのび 竹莊
遠征の鼻に吹雪が消へてゐる 三司
遠征の顏段々に神がかり 吐空
遠征の艦とも見えず波靜か 柳慶
遠征も地圖では近い所にされ 柳秀
今日も又見慣れぬ星へ立つ歩哨 輝拳
遠征地おとぎ話の土を踏み 緑雨
遠征はたゞ勝つて來る勝つて來る 潮花
遠征へ妻子を思ふ日もありて 寄與史
駐屯三年芋も作つたしらせが來 普天
遠征のこゝにも矢張り秋の虫 萬的
遠征の故郷の夢も見ぬと云ふ 小松園
殘敵を素めて越える幾山河 楓葉
遠征へかもめ眺める日が續き 美知夫
空や水水や空なる軍艦旗 喜由
遠征のみちで訓練つゞくなり 紫香
遠征のこゝに日本の鯉幟 水客
遠征機基地を忘れた樣に飛び 虻蜂
ジヤングルの夢遙かなるお母さん 豆秋
信念に生きスコールを飛びつゞけ 風葉
遠征を明日に控へて髭をそり 紀川
遠征のこれが最後の祖國の灯 蜜彦
兵の夢白堊舘まで押寄せた 銳々
遠征の前夜は母と語る夢 榮次郎
鬼ケ島以來やつぱり犬も征く 鷄城
(五)遠征軍ふるさとに似た島に着き 夜王
(五)遠征の莞爾と驛を發ちしのみ 某人
(五)遠征へ父行つて來いと云つただけ 一鉢
(五)遠征を忘れ兵等は踊る列 博也
(五)祖國遙か明日は散る氣の壕に寢る 拳光
(人)遠征の銃は白布に卷かれたり 晶平
(地)遠征の跡追つかけて餅がつき 豆秋
(天)遠征を秘して私服で戰つて來 美奈子

兼題 敵前上陸 豆秋選

曉に椰子を目當に上陸し 緑雨
敵前上陸固唾をのんでキツトゐる 柳慶
敵前上陸南十字の星明り 久人
上陸だ決死の顏で船を下り 竹莊
無聲映畫のやうに敵前上陸す 萬的
敵前上陸敵の巨砲は空を向き 鮎美
敵前上陸前も後もなく進み 至藝瑠
上陸の一歩手前の母の顏 忠一
敵前上陸蠅が一匹つきまとひ 春巣
敵前上陸こゝが男の子の死どころか 喜由
敵前上陸海邊育ちが腕を見せ 普天
敵前上陸俺もお前も生きてゐた 不二
敵前上陸あの感激の追憶誌 沒食子
茶の味も敵前上陸前夜なり 文雄
全世界アツと云はせて上陸す 勢三
敵前上陸褌の紐締め直ほし 夜王
敵前上陸みんな死の氣の瞳がまとも 柳太
勘付いたらしい上陸みんな伏せ 榮次郎
定石にない上陸へ敵あはて 小城子
敵前上陸それ來たと云ふ逃げつぶり 美知夫
エンジンの敵前らしい音になり 英二
オツトセイのやうに敵前上陸し 角堂
(五)ともかくも大和魂上陸す 艸樂
(五)敵前上陸日本も晴れた月の色 白峯
(五)敵前上陸耳をすませば虫の聲 滿潮

兵隊さんありがとう

(五)敵前上陸膽まで濡れた顏で無事
(五)敵前上陸成功お守さんを干す
(人)敵前上陸　ふと故郷の　濱思ふ
(地)敵前上陸神助の霧がかゝつてゐる
(天)上陸成功千人針もぬれてゐる
(軸)の次はサンフランシスコ上陸

兼題　宣　撫　　沒　食　子選

柳子の木へ　銀幕張つた　宣撫班　　鷄　城
宣撫員　漫畫巧みに　書いてのけ　　某　人
トラックの　土で宣撫は　飯にする　　牛　歩
宣撫班　戰火の消えぬ　街へつき　　美知夫
宣撫班　やつぱり軍刀　さけてゐる　　水　客
良民に　拜まれてゐる　醫療隊　　豆　秋
宣撫班　飛行機に乘る　用が出來　　紀　川
宣撫班　紅一點の　唄が好き　　博　也
終ひには身振りでやつたと宣撫班　　竹　莊
建設の　爲だ現住民の　髮も刈り　　勝太郎
宣撫班　繪の貝の水を　捨てる也　　水　客
宣撫班　ときに地藏の　樣に立ち　　普　天
還卷きへ　宣撫の聲は　强く伸び　　某　人
宣撫する　方がお腹が　すいてゐる　　滿　潮
宣撫班もう方言でやつてゐる　　カズエ
現地語で　もう冗談もいふ　宣撫　　美奈子
(五)宣撫班皮膚の色から親しまれ　　孤　篷
(五)仁丹を持つが宣撫の强味なり　　銳　々
(五)トラホームかとも提げて禮に來る　　喜　由
(五)殺す氣になれず宣撫は豚を飼ひ　　示　子
(五)宣撫班乘せて興亞の船が出る　　豆　秋
(人)日の丸の埃えたを見る宣撫の眼　　鮎　美
(地)小孩の夢は宣撫の唄に搖れ　　小城子
(天)宣撫班　明るい村に　して別れ　　綠　葉
(軸)歸順してからは宣撫に挺身し　　芳　喜

席題　赤　襷　　鮎　美選

挨拶に覺悟のわかる赤襷　　香林坊
赤襷　凛々しい人と見直され　　栞　巢
車窓から半身出した赤襷　　春　巢
あられ降る軒を出てゆく赤襷　　潮　花
來るものが來た赤襷　呼吸をのみ　　千枝丸
赤襷　男の眉の美しい　　滿　潮
妻の瞳もうふり切つた赤襷　　柳　太
村長に初對面した赤襷　　至藝瑠
赤襷へ遠くモンペの姉がゐる　　萬　雷
けふの日の豫定がすんだ赤襷　　文　雄
(五)御民われ押し頂いた赤襷　　小松園
(五)赤襷覺悟新に日を拜む　　カズエ
(五)赤襷かけたそのまゝ膳につき　　妄　夢
(五)赤襷坊やの旗もちぎれてた　　普　天
(五)出發へ地圖を見てゐる赤襷　　彌　生
(人)赤襷牛にも別れをつけて出る　　不　二
(地)營門へさらに決意の赤襷　　彌　生
(天)赤襷母は白髮を染めてゐる　　水　客
(軸)氏神の神酒頂く赤襷　　鮎　美

席題　献　金　　銳　々選

散髮をして献金に出かけたり　　春　巢
献金の主路吹の路次の奥　　栞
献金の至情官報はみ出さう　　萬　雷
貯金箱割つた献金端錢あり　　波夢造
献金に意義なし常會山となり　　寄興史
十錢の献金吹雪の中を來る　　滿　潮
献金の數へる手數喜ばれ　　不　二
背のびして献金をする小さな手　　紀　川
献金に意外給事の名を見つけ　　豐　造
恤兵部小さいお手々もまじつて出　　妄　夢
献金した足で夜業の灯へ戻り　　夜　王
献金をした日の月がまんまるく　　香林坊
(五)献金へ未だたくましき歸還兵　　鮎　美
(五)献金をした子の下駄がちびてゐる　　美奈子
(五)一同と書く献金はモンペで來　　紫　香
(五)わてにかて軍艦のたと出來るんや　　至藝璃
(五)献金へ鳥居を一つくゞつて來　　某　人
(人)献金の頁活きてる牧支帳　　勢　三
(地)太陽の直射献金して戻り　　鮎　美
(天)恤兵部勝ち拔く顏へ忙しく　　博　也
(軸)献金の日の神棚のさやかなり　　銳　々

支部對抗句戰

★川・雜抗句戰は各支部から代表選手を各二名選出し、三回戰までは便宜上一部と二部に分れて闘ふこととした

(一部選手とに優劣の差を認めたわけではない)

★先づ第一部選士によつて句戰は開始された。開始と同時に戰ひは白熱化した。一部の第一回戰及び二部の第一回戰の勝負は次の通りである。

○印は勝、(　)内は選手名、審判は路郎師。

○有恒倶樂部(至藝璃)＝城南支部(小松園)、○神津支部(香林坊)不戰一勝、○鐵道病院支部(春巢)＝鐵信病院川柳會(沒食子)、○豐中支部(潮花)＝大鐵局支部(柳太)、○堺支部(詩郎)＝尼崎支部(美知夫)

○松坂倶樂部(孤篷)＝梅田支部(綠葉)、○阪大川柳會(栞)不戰一勝。○櫻島支部(眞生)不戰一勝。(以上一部)　○尼崎支部(寄史史)＝梅田支部(紀川)、○城南支部(滿潮)不戰一勝、○光笑會(白櫻子)不戰一勝、○神津支部(不二)＝豐中支部(一笑)、○有恒倶樂部(萬雷)＝松坂倶樂部(博也)、○鐵信病院川柳會(喜由)不戰一勝、○堺支部(角堂)＝櫻島支部(風棚)、○大鐵局支部(萬的)＝鐵道病院支部(カズエ)(以上二部)

次で一部及び二部の第二回戰に移る。

○有恒(至藝璃)＝神津(香林坊)、○豐中(潮花)＝鐵道病院(春巢)、○松坂(孤篷)＝堺(詩郎)、○櫻島(眞生)＝阪大(栞)(以上一部)。○城南(滿潮)＝尼崎(寄興史)、○光笑會(白櫻子)＝神津(不二)

○有恒(萬雷)＝鐵信病院(喜由)、○大鐵局(萬的)＝堺(角堂)(以上二部)。

次いで一部二部の第三回戰に移る。人氣沸騰、場内騷然。

○豐中(潮花)＝有恒(至藝璃)、○櫻島(眞生)＝松坂(孤篷)(以上一部)。○城南(滿潮)＝光笑會(白櫻子)、○有恒(萬雷)＝大鐵局(萬的)(以上二部)

準優勝戰(一部・二部)○豐中(潮花)＝櫻島(眞生)

○城南(滿潮)＝有恒(萬雷)

優勝戰○豐中(潮花)＝城南(滿潮)

★總評。各支部の代表選手が支部の名譽にかけて何れも善戰されたことは愉快であつた。中には練習不足で脆くも破れた方がないでもなかつたが、前年の支部對抗句戰に於て優勝した阪大の栞選手が第二回選で新進に名をなさしめたことは双葉山が土俵を破つた觀があつた。有恒の至藝璃、萬雷兩選手は實力を發揮して善戰、潮花選手が强豪滿潮選手を屠つて優勝したことは毎月の道場に於ける錬成のたまものであらう。

○

★師走の川柳大會は斯くして幕を閉ぢた。終りに各地から出句の御聲援、支部及び不朽洞會員諸氏から大會費として多大の御後援のあつたことを深謝する。(大會委員記事係)

柳界展望

催

▼本社一月句會は十一日午後五時半から御津八幡宮で開催、全出席者の對抗句戰で闘魂を養ふ▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は十日二十四日午後二時▼有恒倶樂部川柳講座は十四日、廿八日午後五時開講▼阪大川柳會は廿六日午後四時▼大阪警察病院川柳會は十九日午後四時▼尼崎住友產報川柳會は十三日午後七時▼大阪遞信病院川柳會は十二日午後四時▼川雜・六支部合同川柳會（大鐵局、豐中、梅田、櫻島、神津、鐵道病院）は十六日午後五時半大鐵クラブに開催▼川雜・堺支部句會は廿一日午後六時半、英二居に於て開く▼川雜城南支部は一月七日、小松園居で新春句會開催▼川・雜尼崎支部句會は一月廿四日午後六時尼崎昭和荘で開催、鮎美氏出席▼川・雜松江支部では十二月十四日祥月庵で師走義士句會開催▼千石荘川柳會は舊冬十二月十九日開催、沒食子氏出席▲十二月十日、橋本綠雨氏等の大阪市電川柳會主催で、北を護る宮岡白峰氏慰問の川柳會が開催された。

消息

▼本社より傷痍軍人佐賀療養所へ慰問誌を寄贈、感謝狀を拜受▼創元社の「創元」は十二月號限廢刊▼掛飛吉宣氏は「川柳雜誌」の昨年の八月號までをボルネオ派遣軍の報道班に殘して瓜哇に移られた▼麻生路郎主幹編纂の「陣中川柳」が慰問用として興亞書局から近く刊行されることとなつた▼日本出版文化協會は近く解消、日本出版會（假稱）となつて一層强化されることとなつた▼西田艸樂氏（不朽洞會員）夫妻は元日の夜行で發つて道後に滯在▼戸倉曹天氏（不朽洞會員）は一月一日の午後から郷里丹波に歸省され、その夜、村の人々を寺に招いて十六ミリ映寫會開催戰時觀念の注入と職域奉公の激勵をされ、併せて農山村の慰問をされた。▼中島生々庵氏（不朽洞會員）の大坪小兒科診療院は一月以降中島小兒科診療院と改稱されることとなつた▼妹尾八九滿氏（不朽洞會員）は目下郷里鹿兒島縣末吉町に歸省して病氣靜養中▼福井哲氏（不朽洞會員）は一月十七日より八日間に亘り松坂屋七階に催された每日主催の日本寫眞美術展覽會に特選一點、入選二點の榮を克ち得られた▼池田可齊氏（仁川）は一月十九日久し振りに上阪、來社され一時間餘を主幹と歡談された▼月原宵明氏（不朽洞會員）は伊豫相互貯蓄の支店長代理に榮進された。▼清水白柳子氏（不朽洞會員）は一月十二日出雲大社へ參拜された。▼川出美根子氏（芦屋）は昨夏から病臥、今なほ療養中である。一日も早く全快を祈る。▼藤本蘭華氏（京都）は廿四日から三日間、聖冒奉戴金光教大會のため金光町に滯在された▼尾崎正柳氏（島取縣）は療養所は退所されたが、この寒さに、難澁されてゐるそうである。挺身報國された氏の健康の上に天惠の多からんことを遙かに祈つてゐる。▲安井ひろし氏（徐州）は十二月に創立された中日文化協會蘇性分會の常任理事に就任發會式には蒋民謳外交部長も來徐された由▼弘津柳慶氏（朝鮮）は十二月下旬一週間ほどの豫定で郷里山口縣玖珂郡鳴門村湯崎に歸省された。▼橋本克海氏（滿洲）から「健康上妻子を故國に歸へし一人頑張つて居ります」との頼りに接した。祖國のため健闘を祈る。

慶弔

▼長野晴濱氏（寶助員）の令息觀氏は一月二十五日鈴木哲氏令嬢和子さんと芽出度く華燭の典を擧げられたお慶び申上げる▼北川春巢氏（不朽洞會員）は一月十五日、長男睦彦君を儲けられた▼「雪」時代の同人、信時潔氏は朝日文化賞を贈られる榮譽を擔はれた▼多賀博氏は朝日新聞の理事の重責に就かれた▼納谷清四郎氏（北支）は准尉に昇進された▼日本蘭の栽培で知られた吉田安正翁が一月十八日に七十九歳で長逝された山本蕣光氏が昭和十四年に翁の金婚式を祝して句集を捧げた記憶が蘇つて來る▼大原孫三郎氏（倉敷）が一月十八日永眠された享年六十四▼石田元季氏（名古屋）が一月十二日に逝去された。謹悼。▼小川彊太郎氏（寶寶會府支部庶務部長）の母堂ヤス刀自が三十日に永眠された享年六十七、謹んで悼む

改號

▼武部香林坊氏（不朽洞會員）は香林と改號

正誤

▼本誌第二三七號の二八頁上段一六行目と同頁二段二七行目、四段十四行目の青々は青々子と訂正

廻轉椅子

★戰線銃後の本誌に對する好評に次ぐ好評に酬ひるためには、默々として敢闘する以外に方策はなかつた。昨十二月には、十二月號と新年號とを矢繼早やに刊行、その間、大東亞戰爭一周年記念川柳大會を開催するといふ夜を日についての素派らしい活躍振りは、聖戰二年を迎えても、その手を緩めず押しの一手で闘ひ拔いたが、一月二十日に至つて遂に私は臥床するのやむなき狀態となつた。疲勞から來た風邪である。周圍のすすめによつて、數日間休養することとした。從つて拙稿「初等川柳講座」も「川柳の近畿大和篇」も休載する事とした。御諒承を請ふ。

★本號の表紙は、中華民國參戰と共に、輸送戰線に重要性を持つジャンクである。岩崎柳路氏の撮影

★月評「川柳一ト筋」は葭乃がリーダーとなつて、中堅作家紫香・帆船・一笑・香林の四氏が白熱的批評を試みた。

★「彼を見て我を思ふ」の執筆を諸家に需めて本誌を飾ることが出來た。この好題目で引續き諸家を煩はしたいと思つてゐる。御愛讀が願ひたい。

★日本出版文化協會の用紙割當は、ますます強化され一—三月割當量は平均四割減となつた。手持品で極力敢闘して來た弊誌も、將來にそなへるため、次號から多少の減ページを斷行することとなつた。大資本の大雜誌すらグン〳〵減ページしてこれが對策に腐心してゐる際、ひとり我誌のみが晏如としてゐる譯には行かない。讀者諸賢に於かせられても這般の苦心に對する御明察と、一層の御支援を請ふ次第である。

★次號から多少の減ページを斷行するので、編輯への苦心は更に鍍骨碎心、内容の充實と質的向上を目標に無駄のない編輯へ緊縮驀進する覺悟である。從つて「一路集」や各地會報の如きも、佳句重點主義へと突驟し、產業戰士のためには、特別の發表機關を提供して、これが不足を充塡するに努めることとした。

★三月七日に山口市湯田町で第五回西日本鐵道川柳大會が開催されるので、西下することとなつた。斯うした機會に多くの柳人にお目にかかれるのを今から樂しんでゐる。都合で歸途は山陰廻りにしたいと思つてゐる。時間のない人は車窓でも會ひたい。（路郎生）

いのちある句を創れ

俳句

投稿清規 ▼用紙は原稿用紙▼女字を正確▼題目月日及傳所記入▼締切は月廿五日▼投稿先は本社宛

本社一月例會

一月十一日　於御津八幡宮

本社一月例會は一月十一日夕刻から御津八幡宮に於て開催された。雨は霽れたが四十年振りの寒さであるにも拘らず、川柳道場の提灯目指して詰めかけ定刻にはズラリと句陣が張られた。受附けでは對抗句戰を準備して「東」と書いた紙と「西」と書いた紙を出席者順に配布された。例によつて、席題選の披講に次いで、講演が開始された。石井白面人氏の漫談は同氏が差支のため、路郎師代つて時事漫談を試みられ、引續き待望の「表現に就て」と題して、表現とはどんなものかと云ふこと、表現上雖點のある句と、内容に缺陷ある句の實例を擧げ、研究の材料としての論評は裨益するに充分だつた。次いで東西對抗句戰が行はれ第一回戰審判、西尾栞氏、第二回戰審判須崎豆秋氏、第三回審判鳳生路郎師。續いて披講午後十時盛會裡に散會した。（幹事記）

出席者（順不同）

路郎・琅玕子・豆秋・勢三・一笑・香林・詩明・翠光・拓郎・眞星・博也・紫香・孤篷・妄夢・登志緒・栞・通明・千枝丸・幽王・帆船・潮花・一石・吐空・茂・東雀・綠風・九一・不二・千斗・文雄・火泥・アート・霞乃

兼題「旅」　路郎選

旅便り　妻へかくのは　二三行　栞
妻の名を　少さく添へる　旅便り　翠光
眼に見える　やうな芭蕉の　旅日記　琅玕子
旅に出て　他人行儀な　便り書き　幽王
旅の湯に　浸りしみ〴〵　兵に謝し　勢三
悲しみを　乘せた列車の　もとかしさ　不二
旅仕度　衣料切符も　持たされる　同
旅に病んで　夢はやつぱり　母のこと　九一
旅の空　雲が淋しいほど　千切れ　香林
旅情はるかに　想ふ子等のことばかり　一笑
衣料切符旅のポケットにしかとあり　栞
煙草屋に　煙草が無いぞ　一人旅　豆秋
旅の眼も　煙突みれば　身がしまり　九一
旅人に　天守は　霧で　薄れたり　千斗
解散の　一座に　寒い　旅の宿　東雀
商用で　來て　舊蹟の　雨へ　佇ち　千斗
一人旅　隅に　新婚　見つけたり　綠風
初旅の　眼に大阪の　忙しすぎ　香林
旅先の　こゝでも一列　みつけたり　幽王
ほる〴〵と訪ねてくれば碑が一基　栞
旅立ちの　あとほひつそり　風の音　一笑
旅に出て　靴下スフで　ありしこと　栞

兼題「殘り福」　霞乃選

殘り福　貰ひに事務所　早仕舞　博也
殘り福　空の財布を　拾ろて來る　紫香
殘り福　貰ろておはなへ　出る舞妓　潮花
雨傘で　一人出かける　殘り福　豆秋
殘り福　笹の俵を　落して來　潮花
賽錢が　屆いたらしい　殘り福　不二
こんだけの　笹賣ればよい　殘り福　九一
おたやんの　飴見あたらぬ　殘り福　豆秋
おちよやんもいつぱに來てる殘り福　潮花
殘り福　賽錢の嵩　見てもどり　文雄
殘り福　どうぞ特配　あれよかし　幽王
殘り福　電車の中で　拜んどき　紫香
殘り福　巡査も香具師も　聲かれ　九一
花つけて　もろうて詣る　殘り福　一笑
㊙の笹も　見切つた　殘り福　甲東
殘り福　なとと小判を　つけられる　一笑

席題「共稼ぎ」　孤篷選

會計は　分けて貯金の　共稼ぎ　勢三
月々の　貯金が　嬉し　共稼ぎ　翠光
ボーナスを　見せ合つてみる　共稼ぎ　九一
川風に　鱸音　流れる　共稼ぎ　帆船
へそくりは　會社の方でしとくなり　九一
共稼ぎ　ゆるされる日の　近づきぬ　帆船
表札を　二枚出してる　共稼ぎ　栞
日曜は　洗濯をする　共稼ぎ　紫香
共稼ぎ　隣へ　家賃　頼んどき　文雄
妻の手も　夫にまけぬ　ヤスリだこ　潮花
產まねばならず　食はねばならぬ　共稼ぎ　九一
前線の　息子に　貢けぬ　共稼ぎ　潮花
共稼ぎ　噂をもの　とせず　勤め　博也
姑の　愚痴る間もない　共稼ぎ　火泥
二次會に　顔を出さない　共稼ぎ　茂
お隣で　火種を　貰ふ　共稼ぎ　紫香
同じ日に　定期が切れた　共稼ぎ　勢三
二人共　自轉車で出る　共稼ぎ　香林
節電へ　夫婦の　休み　喰ひ違ひ　翠光
アパートを　別々に出る　共稼ぎ　豆秋
終點で　朝を　別れた　共稼ぎ　紫香
共稼ぎ　親父　默々　酒を出し　吐空
共稼ぎ　夕餉の　膳は　まんまるい　茂
共稼ぎ　夫も妻も　いける口　孤篷

席題「卷脚絆」　紫香選

卷脚絆　峠を越える　意氣になり　潮花
頂上に　着いて　脚絆を　卷き直し　甲東
お召待ち　錬成　勵む　卷脚絆　勢三
町會の　意氣も　揃ふた　卷脚絆　文雄
薄氷　脚絆を卷いた人が　踏み　眞星
大詔を　拜して　强く　脚絆卷き　勢三
公用へ　きつちり卷いた　卷脚絆　不二
鶴に似た　足も銃後の　卷脚絆　勢三
卷脚絆　勝利の　靴の音　ひびく　綠風
脚絆卷きかけたところへ電話鳴り　九一
出發の　聲に慌てた　卷脚絆　翠光
防空演習　卷脚絆　とき直し〴〵　博也
霜を踏み　神社へ　續く　卷脚絆　勢三
警報に　妻も着けたり　卷脚絆　茂
町會の　役員と云ふ　卷脚絆　幽王
絶頂で　ゆつくり脚絆　卷きなをし　豆秋
卷脚絆　峠に近い　雨にあひ　潮花
ゲートルが　石段　二つづつ　上り　千斗
卷脚絆　解かずに　茸土間にあけ　琅玕子
先頭に　立つてゐるのが　卷脚絆　香林
卷脚絆　まけば失敬　したくなり　栞
卷脚絆　今日は　握りを　たんと　持ち　香林
オーバーの今日は　要らない　卷脚絆　紫香

句戰「上敷」　栞選

上敷の　焦げたところへ　布團しき　九一
上敷を　取つて　花嫁　迎へられ　翠光
上敷も　買はずに　春の　貯蓄券　琅玕子
上敷で　辛抱をしよ　時局下だ　甲東

句戰「話好き」　豆秋選

話すきで　いよくはめて　飲まされる　綠風
遮斷機が　又おろされた　話好き　一笑
話好き　一汽車あとに　すると云ふ　九一

句戰「下戸」　路郎選

話好き　ぐん〴〵火鉢　押してくる　栞
下戸にとはずゝめ上手な　猪口を出し　翠光
配給は　六合貰ひ　手は四軒　帆船
ビヤホール下戸は　並べず　淋しかろ　火泥
寒風へ　下戸の並んだ　ぜんざい屋　吐空
奈良漬の　醉を笑はれ　ゐたりけり　文雄
下戸だとも　云へず後の　金屏風　香林
乖は　見ても　怖いと　下戸は　逃げ　幽王

川雑

堺支部句會（堺）

一月二十一日　於英二居　角堂報

献納の翼に我の血も通ひ　詩朗
なつかしの故郷を翼の下に見て　葭乃
整備兵翼を撫でて拜んで居　波夢造
隊長機翼を振つて自爆する　同
決戦を語る翼の弾丸のあと　實穂
ちいちくらいちく翼の下の花筵　葭乃
注連縄を翼に張つた椰子の蔭　昌坊
鹵獲機も日の丸つけて飛んで居る　英二
故郷の上で翼を振つて見せ　詩朗
何處までも日の丸の翼伸びて行き　角堂
日の丸の翼は濠洲を孤立にし　同
決戦だなどと碁敵踏らざず　波夢造
決戦にしては静かな神の國　實穂
その前夜母に逢ふたる夢を見た　英二
曙の祈願行事も決戦下　詩朗
決戦だ何の歯躓が要るものか　英二
決戦下捕虜追廻す日本語　詩朗
決戦を挑めば敵機すつと逃げ　同
決戦下生年月日書いて置き　英二
明けてゆく決戦の日は明けてゆく　實穂
決戦に母の寫眞を出して見る　英二
決戦と聞いて静かに眼を閉ぢる　波夢造
着け剣でいざ決戦へ構へたり　詩朗
決戦下丸干も亦鯛の味　昌坊
組合も五玉はねてる　詩朗
伺ひを先づたてゝ置くうるさ型　昌坊
うるさ型格子を足で明けて入り　角堂
うるさ型初手は笑つて口を切り　波夢造
うるさ型來て常會の静かなり　實穂
總會で今日も役員でこづらせ　詩朗
回覧板へまた判のないうるさ型　葭乃
相談は亦の思案で別れたり　角堂
相談に先のお客の長い事　英二
相談に女の來るは金の事　昌坊
相談へ火鉢もしばし忘れられ　詩朗
末席はもう二次會の話らし　波夢造
今日も亦煮えぬ話に顔を客せ　同
相談に來られて涙金を出し　葭乃

川雑

梅田支部句會（大阪）

十二月十六日　於阪神産報會館　鮎美報

茶店の娘いけすの顔がよく似合ひ　敬帆
汽車が出來こゝの茶店もさびれて來　方眠
茶店まで太平洋の風が吹き　吐空
婆さんが居てゝやつぱり茶店らし　一也
この茶店本陣跡の額古く　達朗
埃をあびて茶店はバスの切符賣る　茂
鐵砲は茶店の自慢床に置き　鮎美
ほめられて茶店は奥を開け放ち　同
暗轉に茶店は奥へ吸ひ込まれ　水月
逃げ腰の挨拶でゆく十二月　雲峰
逃げ腰へ今度は條件付になり　治男
逃腰へ香具師はたじやるように云ひ　三司
逃げ腰へ質問をする　よい天氣　登
味噌汁に我が家のねぎがういてゐる　よう路
味噌汁はうまし茶柱立つた朝　紀川
ドラム罐味噌汁たぎる討匪行　茂
歸還して今朝味噌汁へ笑ひあひ　由布
車引く牛もせつせと十二月　雲峰
豐年の十二月號は繪もみのり　豪雄
十二月看護婦の部屋小袖縫ひ　紀川
十二月俺の心も決算期　達朗
警報へお茶漬けの箸おいて立ち　紀川
天井へ子を差しあげて嬉しがり　醉波
天井も廣し大佛風があり　鮎美
純組の手拭ですと背を流し　清子
手拭の白ろさ希望のあかるく　一也
手拭を頭にのせて謠ひ出し　綠葉
花嫁の手拭委見直され　秀峰
工員の出勤踏切待ちきれず　フサ
踏切で待つ間子供を抱いてやり　勝子

川雑

尼崎支部句會（尼崎）

十二月二十日　於昭和莊　美知夫報

節分

歳たけの豆撒にのりかわる　利一
歳なんか聞くなと古い一等兵　同
苦勞しつづけ炬燵がほしい歳になり　千石
歳頃のなやみ八卦もみてもらひ　同
新聞に書かれた歳が最後なり　害興史
丹前で風を上げてる松の内　鮎美
長男の聲がしてゐる臺所　八櫻
客のある日は臺所で寢かされる　利一
臺所へだまつて下りて水を呑み　害興史
自轉車にとられた子の風が勝ち　同
風、風上れ戰地の父に見えるまで　同
上がれよ上がれ親子揃ひの風をもち　加久榮
良覧の心に觸れて風を上げ　正二
風買いに來てくすされたお年玉　同
走る子へ首をふり〳〵揚る風　利一
病んでゐる子の風隊間の風にゆれ　鮎美
へつついのつやが自慢の臺所　正二
今日は一歩入れば臺所　同
慾越に田圃の見える臺所　同
臺所糊の利いてる割烹着　同
臺所見せて轉宅するときめ　千石
里歸りしてなつかしい臺所　鮎美

川雑

神津支部句會（大阪）

十二月二十五日　香林報

おこる間は豆炭外へ追出され　憲勝
豆炭を五つほど借る隣組　紫峰
豆炭へ急が歸れば灰をかけ　風情
豆炭を摑んで嫁の板につき　千賀良
豆炭の灰を削つて客を待ち　豐人
夜店もう終ふ豆炭灰となり　青々子
豆炭へ心のひるむ金の事　若榮女
壁ざめに豆炭白くくすれたり　同
豆炭の割れ隣組もてあまし　乙平
夜半からの豆炭の茶で送り出し　伊太古
地下鐵の天井の汚み氣にかゝり　乙平
地下鐵を出て快よし街の風　風情
地下鐵でチップをやつた娘と出逢ひ　同
地下鐵を我がもの顔に客を運れ　若榮女
地下鐵へわざ〳〵乘せに日曜日　伊太古
地下鐵の驛で逢ふ日の近くなり　同
地下鐵の惜しい氣がした日本晴れ　香林
地下鐵の穴へデパート手を伸ばし　同

川雑

籔川支部句會（出雲）

十二月三日　綠之助報

ふれ合ふて足先さとく引く炬燵　紅ン坊
古武士の感あり父の高鼾　壽年
貧乏も戰ひ抜いた父なりき　勇
留守宅を我が書願の小犬が居　笑朗
温情の祖國の土地は日本晴　大朗
表彰へ父喜びを目に浮べ　廉公
里歸りしみ〴〵炬燵をなつかしみ　同
勿體ないニュース炬燵から離れ　綠之助
留守番に少し荷重な回覧板　同
因縁といふか温情を解し得ず　同

十二月十七日

劇刀の藤に襟足のそいてゐ　八雲
襟正す氣持ラジオの本戰果　さわだ
長期戰の覺悟にて此の貯金帳　まさる
入營に覺悟の出來た母と居る　甫光
戰捷の一年なりき十二月　豐次郎
忘れてた掛取りに來る十二月　一郎

川雑

下關支部句會（下關）

十二月二十五日　於市多樓居　半休報

夜も晝も合圖の連續二十年　望水
險悪な空氣を洒落に救はれる　不川
アスファルト町もせわしい音になり　市多樓
懐も多忙になつた十二月　草路

捷報類り記者も嬉しい忙しさ　不川
忙しい、委モンペのまゝで來る　鯛好坊
井戸端へ忙しそうな顔が寄り　井蛙
此の部下があつて武勳の將となり　草路
武勳皆部下へゆづつて眼を閉じる　不川
院長が武勳の腕へあてるメス　米三
十二月机の位置も替へて見る　益榮
勝ち拔いて師走八日の奉戴日　福井
掛取りも來ぬ十二月などと妻　市多樓
十二月孝行する氣で局へ行き　同

川雜　**小郡支部句會**（山口縣）

十二月二十八日　於鐵道倶樂部　井蛙報

今日もまた罵詈を吐いて床につき　井蛙
お召し待つ子へ初風呂の湯が溢れ　同
初風呂へ今朝のニュースも勝ちこけ　市多樓
初風呂だなどゝ日本有難し　寫榮
來年は來年はとて歳の暮　望水
師走たゞ海と價券殘すのみ　知夫
初めての賞與神にも見てもらひ　井蛙
ボーナスが衣料切符をみな使ひ　市多樓
國策へ副ふ氣賞與を當にせず　茶目坊
戰捷を知らすラジオへ箸を置き　市多樓
玄關の客へラジオは止めて立ち　秀甫
職域に權能を示す歸還兵　青雲
歸還兵嫁の話にてれるなり　美奈子
手柄等ないよと笑ふ歸還兵　いづみ
親切を裏切る友に道で合ひ　山人
親切も程度が過て怪しまれ　鮎美
親切な人へ子供は輪をつくり　素人
警報を聞いて悠々ペンを置き　朗舟
警報を聞いた電車ののろいこと　綠雨
警報に日頃の力信じ切り　八九滿

川雜　**三池染料支部句會**（大牟田）

十二月二十四日　於早鐘講堂　蝶人報

父危篤特急券は手に入らず　路村
自由販賣お菓子朝から賣切れる　抱逸
賣切れました只それだけの不愛想　梅春
賣切となるまで忙し腕まくり　鍋水
刻みだけ並べて煙草屋本を讀み　天風
缺勤防止笑顔の五人組揃ひ　世志一
皆勤の標語職場を休ませず　十四之
前線を偲び頭痛の朝を出る　抱逸
朝禮の點呼も勝てる國の意氣　市丸
皆勤へ見よ〳〵世界地圖の色　初舟
緯解は不要留置へ打込まれ　勇
眞實の申開きが信ぜられ　逸桂
緯解の電話横から助言する　子盛
召集を待つ身貯金を怠らず　世志一
又肥へて來ますと輕く召される日　三千樓
召集へもう南國が目に浮び　天風
白足袋の白さも嫁ぐ日を祀ひ　初舟
お茶の湯へ娘の白足袋は滑るやう　天風
遺骨持つ足袋に埃りのつくまいぞ　同
親心あつて首相の多忙なり　末男
親心無理な希望も聞いてやり　同
戰陣の夢親に甘えた時の事　藤樓
母たればこそ小使も袖の下　同
佛前に捧ぐ賞與は封の儘　逸桂
ボーナスに吊られ職場も休まれず　平人
風今日は寒くはないぞボーナス日　十四之
ボーナスへ我家に春が訪れる　鯛水
明日こそは妻も子も待つボーナス日　藤樓
隆騰へボーナスが來た砲走　十四之
緯解は怒りが解けてからと決め　三千樓
緯解をする氣が強く立上る　草兵
十文半どれが俺のか妻子のか　抱逸
湯治から母の手縫の足袋が着き　逸桂

川雜　**松江支部句會**（松江）

十二月十四日　義士句會　於祥月庵　祥月報

やれ〳〵と上野鐘出して見る　龍人
松阪町魚屋の手に竹刀だこ　將雄
朝日さす雪路をいそぐ義士の列　榮兒
ただれたと見せる大石膝枕　莞路
引上へみんなあきれた顔になり　祥月
其角ふと一句源吾に送るなり　川魚
心眼を尖らす按摩の手が止り　額光
瓦版もう引上を知らすなり　五虎
師直は龜下の艶へころげたり　傳七
大石の酒のにがさを誰が知ろ　同
白粉の匂ひで山科朝となり　九紫

阪大川柳會

十二月十八日　利生報

緯解を口答へだと咎められ　邪生
口答へ母はハラ〳〵する許り　柳秀
味噌汁でやけどしかけた口答へ　春巣
そこ閉めとけと口答への鼻を折り　葉
ぶつ眞似をしてたしなめる口答へ　利生
子が出來てからの女房の口答へ　柳秀
口答へした後の淋しさ二階に居　葉
口答でバスしたほどの彼氏だよ　うた女
逃げながら口答へする男の子　利生
口答へ背できいとく父となり　葉
口答へした子が出世頭なり　柳秀
銀狐宅は昔屋でゴザーます　同
首巻のまゝで叔父さん上つて來　正甫
首巻に粉な雪つけて子は戻り　利生
首巻をとる眞似をした家主なり　葉
首巻のまんま夕刊眼鏡越し　利生
銀狐宅が〳〵の口が過ぎ　柳秀
首巻を濕布の上へして出かけ　春巣
雪滑りマフラは風にをどらされ　柳秀
銀狐榮華の夢となりにけり　同
銀狐巻いて女給の御出勤　正甫
曇先をショールで包む寒いこと　柳秀
水ばなを拭いて首巻叱られる　一彌
ラッコ襟したのが無心云ひに來る　うた女
肩かけを取るにも女しなが要り　柳秀
首巻の中から夜店返事する　葉
姉藝者ショールのまゝで手をかざし　柳秀
首巻すれば御隱居の顔　路生
じみなショールも似合ふなで肩　同
派出なショールが次の間で待ち　同
智慧借りに來て内幕を聞かされる　春巣
點々ととある舞臺は河岸の景　柳秀
配急の豆炭五厘の半端出來　利生
純米にフッと茶漬がしたくなり　春巣
紅葉茶屋時雨るゝ景へ客もなし　葉
神靈の加護を知つてる生殘り　利生
欲しがらぬ子供もあつて國强し　同
ポーナスがあつちこつちの義理をたて　同
釣れそうにないのを見てる人だかり　同
牛肉屋のおつさん理事の名刺くれ　葉
サーチライト雲の低さを見せてくれ　春巣
本復の歩いて見たい春の風　柳秀
藝なしは只コーラスへ這入るだけ　正甫
藝なしのおとなしさをば見染められ　つや女
無藝でも斗酒を辭せざる器量あり　楠水
藝なし猿なとと養子のつつがなし　葉
宴席で藝なし猿は逃げて行き　三生

藝なしほ 末座の方で 猪口を受け 青一路
大晦日 心にもなく 朝寝した 邦生
配給のそばで年 越す大晦日 てる女
除夜らしくなし鐘のならない大晦日 山彦

松坂倶樂部川柳會（大阪）

白面人報

十一月十五日

口下手な 人ばつ かしの隣組 照弘
口下手な 友今 神に 祀られる 良三
口下手の征つて來ますに餘裕あり 朗郎
口下手の 方から先へ 手がかゝり 同
口下手は 抹殺されて 隅に 居り 同
口下手を 母は側から 援けてゐ 湖心
むきだしに言うて課長を怒らせる 乙平
口下手で なそと 前置 長い事 聖司
口下手へ 妻のことづけ 多過ぎる 不二
親方に その口下手を みこまれる 同
口下手の 策は沈默するばかり 博也
口下手へ 長距離電話 かゝつてき 美奈子
云ふなら 今だと口下手 思へども 同
口下手の 主人へ妻の 氣をつかひ 香林坊
口下手は 最後になつて 反對し 石鹿
挨拶は エーとアノーで 終つたり 同
口下手の嘘にまんまとひつかゝり 同
そや〳〵と我が意を得たる聲を出し 同
白粉の 客へ易者の 慣れたもの 良三
白粉を 塗て〻一家を 切り廻し 朗郎
脂粉退 放 娘 心を 痛めつけ 湖心
白粉のカムフラージュは四十過ぎ 乙平
紅葉狩り 化粧直しは 谷に 向き 同
白粉の 下 還暦の 顏でなし 聖司
厚化粧 笑ひは眼元 だけのもの 不二
白粉追放いつでもバケツとゑ構へ 同
夜間營業 首から上へ 塗りはじめ 同
ほんのりと 刷いて夫を 待つ 委 美奈子
腹の立つ 日の白粉は たゝきつけ 同
首筋は 仲居と見える 風呂 屬り 香林坊
倦怠期 教へられたが 白く 塗り 石鹿
介添の 仲人さんが 塗りすぎて 同
たしなみと 云ふ白粉を 母はつけ 孤蓬
玉の輿 白粉 撓けの 匿されず 曹天
年頃か 誰れ教へねど 塗りたがり 同
將棋さす その手に目立つ 爪の垢 照弘
爪と髮 遺書も書いたが 無事歸還 同
母が切る 爪へきちんと 子が座る 忠一
深爪の 指算盤へ 糊をたて 博也
爪切を 借りて事務所の 晝休み 同
爪を嚙む 男こまかい ことに觸れ 香林坊
絲道が出來たとおちよぼ指を見せ 石鹿
マニキュアー雜巾ぐらゐ持ち給へ 同
ゲーテの爪 私の爪も 一寸似る 孤蓬
適はぬと見たか貧けた子爪で搔き 曹天

十二月六日

奥さん ですかと 惡友改まり 忠一
惡友を 嘲けるやうな 俄雨 昭弘
惡友を 待たせた工面 自信あり 朗郎
惡友が 手切れ話に 力入れ 乙平
碁の友に 帶の 逆さ 効めなし 同
交渉は 萬事 惡友 引受ける 不二
惡友も 立派に見えた 赤襷 博也
惡い事 皆んな惡友 脊負はされ 聖司
惡友が 心の糧になる日なり 伊太古
其の通夜に 惡友 全部 攝てゐ 同
惡友の ことにも 觸れる 父兄會 孤蓬
惡友の 妻君同志 かたくなり 生々庵
惡友に死なれめつきり老けてゆき 同
世帶じみ 惡友さばく 手もおぼえ 同
惡友の 電話は秘書に 聞かせとき 曹天
素見しは 二人で行つて 氣が強し 同
惡友は 兩前ボタンの 服で來る 同
少しのせき母は氣にして連れて行き 一清
雜談中 咳をしてから はいるなり 忠一
放送劇變なところで 咳ばらひ 昭弘
病人の 寢息へ咳も 嚙みしめる 不二
入口に 止つた咳に しんとなり 朗郎
脈をとる醫者もひいてるらしい咳 同
咳の聲 あゝ來た〳〵と 煙草捨て 聖司
咳をして皆んなのこわい眼に壓され 同
おもむろに 皮切りの咳 一つして 乙平
抱いた兒が 咳をまねたと 日曜日 庄太郎
ゴホン〳〵 お祖父さん 灰も吸ひ 博也
止めさす 役目が咳に なやまされ 香林坊
亡父に似た咳は一家を振り向かせ 孤蓬
咳までが 父に似てゐる 針仕事 白面人
花嫁に 咳も一つの しなとなり 生々庵
咳止めは飲み〳〵 煙草止められず 同
第三期 位かいなと 咳を聞き 同
訪へど 聲なく 奥でさびた咳 曹天
遙拜が すんであちこち 咳の聲 同

十二月十九日

背のびして 債券を買ふ 局の窓 忠一
威張りでも せわば窓口 寒からう 生々庵
窓口は 顏つきまでが 糊の 立つ 同
窓口の 中はのんびり お茶をのみ 同
窓口は 聞えて居るか ふりむかず 同
窓口を 笑はせ社長に 會つてくる 聖司
働いて みな窓口へ 持つて 行き 乙平
窓口へ 一萬圓を ポイと入れ 伊太古
窓口の 出納係 猿に似て 同
みだれ籠 財布の位置を 確かめる 不二
みだれ籠 うちの腰紐 しときやす 同
媚曳と 知るや知らずや みだれ籠 香林坊
みだれ籠 紀州の波の 音がする 同
亂れ籠 妻の好みの 黃八丈 生々庵
亂れ籠 煙草の空箱 丈殘し 同
おいでやすボンとたたいたみだれ籠 一勢
みだれ籠のまゝの財布が氣にかゝり 正太郎
みだれ籠 嫁入んだは其當座 伊太古
赤襷 ねこ背の 君を見 違える 不二
猫曰く此頃ネヅミ うまくない 聖司
猫何か考へてゐる かがみやう 香林坊
どの猫と魚へ驚ぐ 隣組 同
色眼鏡 かけて點字の ためもしさ 聖司
まつさらの 日めくり之が 人生か 生々庵
又今日から 三百六十五日かい 同
元旦へ 死んだ兒の年 數へて見 不二
徹前の 元旦 武器の 手入など 乙平

有恒川柳會（大阪）

銳々報

十二月十九日

見學に ふと 轡業の 友を見る 青美
ウヰスキーの 溢れる瓶も 見學す 同
見學が 職場訓示も 讀んで行き 銳々
見學へ ハンマー持つは 顧みず 同
見學の 一人 女工へ 話しかけ 同
事あれば長女へ 愚痴を聞かせに來 青美
嫁づいた 長女は母の 鄰を出し 銳々
緣談へ 長女の 理想 高過ぎる 同
長女また 父に内證の 手紙書き 至藝增
父親と うまのあつてる 長女なり 同
長女から 便りがなくて 一家無事 同

警察病院川柳會（大阪）

正柳報

十二月二十二日 於五柳居

孔子には 口下手仁と 見ゆるらし 白路
うまい事言う云ひまかと 同められ 同
口下手の やうで急所を 外さない 雨聲
口下手の 隣組長 まだ續き 湧三
口下手を 買はれ會計 もたされる 同
口下手の御世辭で先の氣をそこね 道明
口下手の 主人にや〳〵 後に立ち 余城
わてなんか口下手だと よく喋り 文龍
口下手を 補ふごとく 女房出る 正朗
口下手の かはり何彼と 手が早く 吉郎
湯たんぽへちと氣が引ける 朝がへり 余城
湯たんぽの 湯も使つてる 拭掃除 正朗
湯たんぽだ 注射だ 廳下 忙しく 道朗
氣をもんで湯たんぽかへるだけの役 同

湯たんぽの一角猫も領したり　雨聲
丹前で出たきり碁打ち歸らない　青柳
丹前を着れば機事もただの人　同
丹前がまだ縫へませぬ子澤山　白路
丹前にくつろいでからの話なり　正朗
丹前のほころび知らず子と出かけ　同
丹前を着ても下役タイプなり　正柳
丹前着る夜醫者から離れたし　同
丹前に着替へて夫婦また笑ひ　吉郎
撮影へ丹前ずらり並ばされ　文龍
新妻は丹前も着すかしこまり　余城
將校行李丹前なども入れて置き　湯三
丹前のふたり默つて膳につき　同
さりげなく丹前覇の箸をとり　同
埋火をかいて丹前策を練り　同
丹前の懷手奴凧に似て　五柳
新婚へ丹前二つ持つて來る　一柳
相談も先づ丹前に替へてから　浩
二三日置けと丹前貰けて居ず　路郎
丹前は明日立つ人と見えぬなり　同
丹前のちよんちゃちよんで野暮な唄　同

大阪遞信病院川柳會

十二月四日　於辰巳家　沒食子報

留守番は喰ふ事ばかり氣にかゝり　司白
留守番を母にまかせた共稼ぎ　竹莊
炬燵の火一度確かめて留守にする　喜由
郵便受お留守ですかと覗かれる　同
美しいのが來たと留守番からかふ氣　同
留守勝で組長さんへ氣兼をし　沒食子
催促はうす〳〵奥に ゐるを知り　同
出征の留守に目出度う一人增へ　獨樂
いつ行ても留子々々々の市議でゑ　方正
姑につかへて留守をよく護り　沒食子
九十過ぎ留守番してる課でなし　路郎
留守番が居る筈といふ家を訪ひ　同
妻の留守坐ほるところのない寒さ　同
留守番に費をひとり置いて行く　同
又旅かなどゝ玄關から歸り　同
心安い質屋へ出物頼んどき　沒食子
臟品と質屋うす〳〵知りは知り　同
頼まれた質屋通ひは氣にとめず　榮實
歳末は質屋の話寄席でもて　方正
偉い人質屋の味も知つて居り　同
質の値が下りますよと脱がされる　獨樂
赤さやで百兩貸せと居直られ　同
質草をかゝへて將棋のぞいて居　同
紹介で來ても質屋は貸し渋り　喜由
四五枚殺してのれん寒う出る　同
質屋いま邪魔くさそうにエプをつけ　同
五圓とはめつそうな顔質屋する　同
苦學生質屋の利用價値を解き　同
債券が質屋の藏で當つて居　同
買立ての本を殺した頃若し　方正
門口はひつそり質屋閑でなし　同
道行きのほんち質屋の味を知り　榮實
質屋まで來ても女はみえを張り　喜由
大統領又かと思ふ十二月　卓二
十二月錦旗南へ征くの月　獨樂
十二月去年は敵を追ふてゐた　榮實
九柱の軍神生んだ十二月　晴夫
札束で頭を殴く十二月　方正
歌舞伎座を見上げたばの十二月　矢納
十二月婚約なりて辭表出し　沒食子
十二月産月ながら擇がけ　同
十二月百圓紙幣をこわしに來　喜由
眞劍に嘘考へる十二月　同
食ふてちゃのまゝ十二月來てしまひ　同
仕立屋へなんべんも行く十二月　竹莊
手土産で來たのがこわい十二月　喜由
自由經濟の餘燼くすぶる十二月　沒食子

千石莊川柳會（貝塚）

十二月十九日　於娯樂室に　無一物報

催促狀ふゝんともとの筒に入れ　闌堂
催促に來た足音を聞いて逃げ　光雄
催促はやつぱりせずに歸つて來　八郎
催促も出來ない程の弱氣にて　無一物
催促をされて氣がつく借りた金　友三郎
目と鼻の近き催促されず暮れ　稔一
催促の文句に困る間柄　五郎
催促へ只へイ〳〵と頭下げ　茂
年の暮催促交じりの挨拶狀　英夫
催促が出來ない程の美しさ　湯鷹
手きびしい催促が來る年の暮　登志
氣兼しながらも貸したる金を催促し　前中
世間話すんで催促しはじめる　次郎
征く友に催促もせず餞別し　松樹
御もつとも樣と催促せずに去に　繁
催促をよそに小金を溜めてゐる　小坊主
借りた本催促されて急ぎ讀み　麗沙王

住友産報川柳會（尼崎）

十二月九日　路風報

やりくりは妻にまかせて髯をたて　清龍
やりくりをかくして社長椅子にゐる　路風
やりくりの話子供を寢かしとき　美知夫
やりくりの上手同志が隣り合ひ　アサヲ
やりくりはへそくり出したとは云ず　南濃路
やりくりをした休日が雨となり　毬夫
やりくりが上手な妻へ頭下げ　八櫻
やりくりの波乘越えた針仕事　正二
やりくりの出來る間は見得を張り　小谷
やりくりをした紋付へはねを上げ　正二
柄漏りする傘でやりくり出かけたり　美知夫
やりくりへ佛にすまぬ物を賣り　同

もしほ川柳會（因島）

十二月六日　於鐵蜂居　一滴報

思ひ出の占領地をば地圖に見る　秀峰
思ひ出を批判してみる歳になり　一滴
思ひ出があつて賑ふクラス會　朴想
殊勳甲忘れて居つた友が居る　英夫
懷かしい訛に出合ふ駐屯地　愛坊
手辨當朝の土を强く踏み　凡々子
憤激の力高鳴る鎚の音　鐵蜂
農繁期春に小さな夢が搖れ　默雷

徐州川柳會（徐州）

十一月二十八日　於とし子居　ひろし報

文化費が虐待される家計簿　東亞
轉任の記念と課長犬をくれ　玉人
記念日にあの日のニュス眼にうかべ　ひろし
庭の菊ちよつぴり賞めて師匠去に　多々良
童女らの毬見失ふ菊の庭　神峰
木炭の自動車客が後を押し　鴨人
首相ふと炭燒く村を驚かせ　雨町

非特異性全免疫元
オムニコメツト
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症抜粋）
淋菌、各種肺炎、肋（膜）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蓋膜、其他各科、急性、熱性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、効効迅速、價格廉廉。
（包裝）
三cc壓管入　一円
三cc壓管入　一円二〇錢
一cc壓管入　一円
一cc壓管入　一円二〇錢
一cc壓管入　一円五〇錢
一文獨壓量
發賣元　株式會社黒田藥品商會　大阪・東京

社關係人の々

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雖　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴作　藤村演　藤本卯之助　鶴原退蔵　浅田一　末弘巖太郎

客員

島山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　鶴井晨修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　篭田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚

不朽洞會員

橋本緑雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田蚺樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　須崎豆秋　寺井鋭々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤蓬　石井白面人　川出美根子　中島生々麓　戸倉曾天　古川風竹　剛山北海　古川魔花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貫志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢遊　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾不水　櫻川不葉　田中風葉　中原銑人　好崎申仙　濱田久米雄　中雨月　櫻川不水　河浪玲之介　野口柳太　小川恒明　飯尾寄與史　酒井美知夫　小林文月　阿萬的　谷川緑風　武部香林　谷口緑葉　德永雅美　河野夜玉　上田翠光　井河一湧三　八竹正柳　長野谷竹莊　水明石柳次　村上角堂　福井哲　小川靜觀堂　小松浦帆船　田邊由布　長谷川三司　野元吐空　伊古田伊太古　乙谷乙平　岡宮田不二　島嶺泉　池水湖心　木中村聖司　橋福諸田東妄雷　下鹿夢王　篠山籌彦　月原宵明　高田抱邊　丸尾潮花　黒川蓊香　正本水客　岡某人　岩崎松代　國半休　岩崎水虹　植山九天　夷一笑　鈴木九坡　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　妹尾八九満　吉田水車　市場沒食子　川愁水　西川愁水　清水史路　清水友帆　清水白柳子　小畑自有浪　魚住瀟潮　菊澤小松麗　杉原大研子　櫻川不葉　須崎豆秋　寺井鋭々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤蓬　石井白面人　川出美根子　中島生々麓　戸倉曾天　古川風竹　剛山北海　古川魔花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貫志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢遊　藤岡至藝瑠　西川青美　米本儀助　吉田萬雷　布施筑川　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　關根山彦　西尾不水　櫻川不葉　田中風葉　中原銑人　好崎申仙　濱田久米雄　中雨月　櫻川不水　河浪玲之介　野口柳太　小川恒明　飯尾寄與史　酒井美知夫　小林文月　阿萬的　谷川緑風　武部香林　谷口緑葉　德永雅美　河野夜玉　上田翠光　井河一湧三　八竹正柳　長野谷竹莊　水明石柳次　村上角堂　福井哲　小川靜觀堂　小松浦帆船　田邊由布　長谷川三司　野元吐空　伊古田伊太古　乙谷乙平　岡宮田不二　島嶺泉　池水湖心　木中村聖司　橋福諸田東妄雷　下鹿夢王　篠山籌彦　月原宵明　高田抱邊　丸尾潮花　黒川蓊香　正本水客　岡某人　岩崎松代　國半休　岩崎水虹　植山九天　夷一笑　鈴木九坡　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　妹尾八九満　吉田水車　市場沒食子　川愁水　西川愁水　清水史路　清水友帆　清水白柳子　小畑自有浪　魚住瀟潮　菊澤小松麗　杉原大研子　櫻川不葉　須崎豆秋　寺井鋭々　大西八歩　高澤一浪　戸田孤蓬　石井白面人　川出美根子　中島生々麓　戸倉曾天　古川風竹　剛山北海

支部と幹事

道頓堀支部　大阪　萬よし
函館支部（函館）晨修
梅田支部　大阪　鮎美
出雲支部　島根　緑之助
鳥取支部　鳥取　鐵州
松山支部　松山　耕一路
御池橋支部　大阪　夢裡
松江支部　松江　祥月
大鐵局支部　大阪　柳太
櫻島支部　大阪　秀溪
西條支部　愛媛　英賀夫
城南支部　大阪　申仙
今治支部（今治）文庫
川雑光笑會（大阪）里十九
竹原支部（廣島）芳郎
廣島支部（廣島）久米雄
豐中支部（豐中）紫香
下關支部（下關）牛休
北鮮支部（羅津府）美笑
蒙彊支部（張家口）柳路
上海支部（中華）天作
鐵道病院支部（大阪）春巣
櫻島支部（大阪）秀溪
市川柳會（大阪）翠芳
布哇支部（布哇）鬱花麗
堺支部（堺）角堂
岡山支部（岡山）九坡
尼崎支部（尼崎）美知夫
日和佐支部（徳島縣）賢次
三池染料支部（大牟田）蝶人
大洲支部（愛媛縣）椋影
小郡支部（山口縣）井蛙
熊本支部（熊本）水源
仁多支部（島根縣）一聲
神津支部（大阪）香林
津山支部（津山）一將
花麗支部（大阪）妄夢

募集

第二十卷 第四號課題

二月廿日締切（十句以内）

大陸　大島濤明選
骨　清水史路選

第二十卷 第五號課題

三月廿日締切（十句以内）

借電話　奥村丹路選
目藥　吉田水車選

第二十卷 第六號課題

四月廿日締切（十句以内）

慾　池田可宵選
都會　正本水客選

毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雜吟廿句）　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行過文漫談）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、半紙又は大型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書（川柳雜誌原稿）と封筒に朱記の事。
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號

川柳雜誌

第二十卷 第二號

毎月一回一日發行

定價

一冊 ㊥ 金三〇錢
半ケ年・六冊 金一圓八十錢（送料一錢）
一ケ年・十二冊 金三圓六十錢（送料十二錢）

外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ

御註文はすべて前金で願ひます。振替（大阪七五〇五〇）又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は舊新併記の事。

昭和十八年一月廿五日印刷
昭和十八年二月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告　本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部（御一報下さいますやう。）

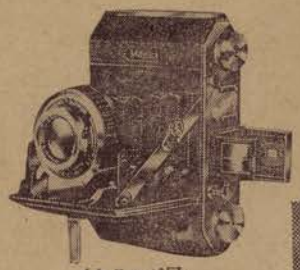
日本出版文化協會會員
發行所　川柳雜誌社
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）
振替（大阪七五〇五〇）
電話土佐堀　三三三三番　八一六四番
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
印刷兼發行人　麻生幸二郎
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社

送本者名　住所　氏名

★毎號、戰線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込み下されば郵稅を奉仕して直接發送致します。

セミ・ミノルタ

代表的國産カメラ



ブロニー
16枚撮り

II型F4.5付
¥117.00

F3.5付
¥141.00

距離計
¥21.00

(カタログ呈
要郵券十錢)

淺沼商會大阪支店

大阪市南區順慶町四丁目
電話船場905・1905・1396・5095番

ガラス壜代用 紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

二葉屋商店

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
電話事務所用 天下茶屋 五八〇二番 五八〇三番
工場用同 五八〇四番

あ産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

楢林醫學博士
片瀬醫學博士 推奬 監査

麻生路郎著

新川柳評釋

定價〇・八〇 〒〇・〇八

本邦の川柳で一粒選りの名句を蒐め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。

藤村誠一著・序文 麻生路郎・百田宗治

隨想集 詩人複眼

定價一・〇〇 〒〇・〇八

川柳眼で書かれた隨想集。その大半は鈍驢張鈍のペンネームで「川柳雜誌」に發表されたもの。

麻生路郎著・柴谷宰舟畫

累卵の遊び

定價一・〇〇 〒一・一六

名句に名評釋がしてあり、動例となる句が滿山蒐めてある。漫畫三十二葉挿入。

戸田孤篷著・麻生路郎序

川柳 二千六百年史

定價〇・九〇 〒〇・〇八

著者一人の創作・詠史川柳の尖端をゆく。

街の雜音(賣切) 大空(賣切) 人の一代(賣切)

堺市出島海岸通二丁目一八二
發行所 不朽洞
振替大阪三〇三九二番

SENRYU ZASSHI No・229
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Nippon.

川柳雜誌 第二九號
大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十八年一月廿五日印刷納本・昭和十八年二月一日發行
定價 金三〇錢（送料壹錢）

必勝祈願

伊勢大神宮
橿原神宮
熱田神宮
拜參

吉野神宮
石上神宮
春日神社
大神神社
枚岡神社

吉野神宮驛下車
天理驛下車
關急奈良驛下車
櫻井驛下車
枚岡驛下車

關西急行鐵道